
ココから始まる

Joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココから始まる

【Nコード】

N9739I

【作者名】

Joker

【あらすじ】

――寝ていたら闇の中にオレと女神らしき女性がいた――
(ココはどこだ?)

「私は女神よ。メンドクサイから単刀直入に言うけど、暇だから異世界に逝ってきて!じゃあ、頑張ってねミ★」

始まりはココから(前書き)

初めまして、Jokerです。

初めて作ったので間違えたり、更新が遅れるかもしれませんが、温かい目で見守っていただけたら本当に嬉しいです。

それでは話はこれまでにして「ココから始まる」スタートです！

始まりはココから

「なんか暇だから、異世界にいっちゃって!」

ハイ、さて何故こうなったのかというのは・・・

「ああー疲れた。俺は寝る。もう寝るんだ。」

「明日、テストなんでしょ? 大丈夫なの?」

「知らない! 猛烈に僕は疲れたんだ!」

ベットの中に潜ると不意に辺りが暗くなった。さっきまで親の声が聞こえていたのに、この空間が、今までの世界とは違う異空間のような気がした。

目の前に女神らしき奴が立っている

(どうか、ココはどこだ?)

女神らしき女性が言う。

「私は女神よ。」

(おお! 予想が当たった!)

「なんか暇だから、異世界にいっちゃって!」

「オイオイそりゃないだろ」

「死んでもいいから! 頑張っちゃってね!」

もう投げやりになっている女神。

「オイオイ、女神よ、死んでもいいってなんだよ。それとオレは異世界にはゼツター行かないぞ!」

「うるせえんだよクソガキが! 黙っていつてこい!」

「わあ、俺の女神のイメージが音を立てて完全崩壊してく・・・しかも、まさかの女神の逆ギレ! お前、口悪すぎる。」

「大丈夫、君はこの世界では行方不明ということにしておくから?」

「うん、素晴らしいスルーをありがとう。何が大丈夫なのかはあえ

て質問しないけど・・・冗談だろ？」

「ううん、ホント。」

「ホント？」

「ホント。」

「嫌と言ったら？」

「ご・う・も・ん？」

「素敵な説明をありがとう。全てを理解できました。」

「よくできました。では、異世界の旅へレッツゴー」

「嫌だ。行きたくない」

「行けつつってんだろ！」

「I can't！」

「知るか、さっさと行け！そして無様に死ね」

「それは絶対女神が言っちゃダメでしょ」

「うっとしいな・・・人生諦めが肝心なんだよ？」

「その？、可愛くねえつつうの」

「はい、私キレましたー。もう知らね。本人の許可とかいいや。では逝ってらっしゃい」

「行くの漢字がちg」さよなら。「あああああ・・・」

始まりはココから（後書き）

これからがんばっていくので宜しくお願いします。

いきなり初めての戦い（前書き）

こんにちわ

更新が不規則になるとありますがそこは勘弁願います。

それと前回読んでいただいた方ありがとうございます！

今回は、龍二が異世界に来て初めての戦いのことを書きました。

では、第二話スタートです！

いきなり初めての戦い

「・・・ここはどこだ？ 確か異世界に飛ばされて・・・ココ異世界！？」

一人でパニックになっている龍二。その近くにはいろいろな荷物と手紙があった。

（モンスターとかいろいろ出てくる異世界に送ったから！魔法とかは荷物の中のピアスを装着すれば使えるようにしてるからね！武器は名前を言えば出てくるけど、2回までしか使えないから気をつけて！後は自力でガンバレ！！
by とつても可愛い女神様）

「・・・うわぁー冗談でしょ？あの女神、後でゼッター殺してやる。」

とは言いつつ何もできない状況。とりあえず武器を出してみることに・・・

「名前を言えいいのか・・・よし決めた！黒鎌！」

結構、ゴツイ悪魔的な武器を取りだした龍二。

——ゴトツ——

（あ・・・それだけ？）

「さてと次は魔法だな！ピアスを装着して・・・どうやればいいんだ？とりあえずファイア！」

——・・・——

「やっぱり駄目か・・・んーと、とりあえず街に行って誰かに聞こう！」

張り切っているがあることに気が付いた龍二。

「・・・街ってどこ？」

さまよい続けること10分後・・・

ゴ布林(?) A「人間だ！捕まえてリーダーに捧げようぜ！」

「ちょっと道をお尋ねしたんですが・・・。」

ゴ布林(?) B「これでオレ達も昇格できるかも・・・。」

ゴ布林(?) C「オイお前！とりあえず死ね！」

「人の話を聞けや！あと、死ねだど！お前ら全員死ね！」

ゴ布林(?) C「俺らに死ねだど！痛い目にあっても知らないぜ！」

悪役をしているゴ布林らしき奴。龍二は黒鎌を構える。・・・構え方ってどうすればいいんだ？

適当に黒鎌を構え、相手に向かって走るが・・・。

ゴ布林(?) A「アイツ何やってんだ・・・？」

一人で敵を横切って走る龍二。

「あ・・・れ？ちょっと待ったあああああ！どこまで行くんだよオレ！」

猛スピードで走り去る・・・。

ゴ布林(?) B「スゲェ！」

元の場所に戻ってもう一度戦いを始める龍二。もう一度自分の力を再確認するために、ジャンプしてみると・・・

「うおおお！スゲェ！24・31メートルぐらい跳んだぞ！！！」

意外と細かい龍二。何を思ったのか相手に向かって素振りを3回。

「・・・えいっ」

――ズシャア――

何ともグロテスクな音がした。

「ゴブリンの奴ら死んじやったよ・・・うう気持ち悪っ」

10秒ほどすると消えていくゴ布林達。するとそこには銅のコインがあった。

(RPGみたいなキターーーー!)

今までのブラックな気分は・・・

「よし、とりあえず勝ったぞ! なんていうか、女神の奴、力増幅? みたいなやりすぎだろ……。まあいいや、あの技に名前を付けよう♪」

テンションMAXで街を目指しながら技の名前を考える龍二。

「そーいえば一瞬だったよな・・・よし”瞬滅”にしよう!」

こうして最初に使った技は「瞬滅」に決定した龍二だった。

いきなり初めての戦い（後書き）

・・・がんばりました。

かなり短い本文となっていますがこれからも宜しくお願いします！
それと、感想お待ちしております

始めての仲間（前書き）

こんにちは

この前の小説は、文章が少なすぎましたね・・・

今回は、結構がんばりました。これから頑張りますのでよろしくおねがいします！

そして、今回は龍二に初めての仲間ができます。

それでは第3話スタートです！

始めての仲間

―― 一人で歩くこと2時間 ――

「・・・ん？ 街かな？」

やっと町が見えたところで走り出す龍二。1分もせずに街へ着いた。

「おお！ 店だ！ 店がいっぱいある！」

テンションMAXな龍二

「とりあえず、食料と水を買うとするか・・・」

その辺の店でモンスターを倒した時のお金を使って、食料と水を買うことにする。

「兄ちゃん、お金が足りてないよ？」

（あれ？ ん～どうしようか・・・なんか売っていいのかな・・・。）

「おじちゃん、この鎌あげるからそれで許して!？」

「こんなゴツイのくれるのか？ ありがたいね！ よし交渉成立だ！」

龍二は思いきって黒鎌と引き換えにパンと水を買ってついでに龍二の好きなサラミらしきものを買った。

（んーと、これからどうしようか・・・お金使い過ぎてもうないな・

・稼ぐとするか!）

・・・その辺を歩いていたら壁に張り紙があった。

―― 武道大会 ――

ここに白熱のバトルが起こる！

優勝者には賞金360万カインと、この「ラドウピラス」が贈呈されます！

誰でも参加OK！

10月4日開催！

開催場所 街の中央集会広場

「うむ！ これにしよう！ 15月3日は今日だっておじさんが言って

たから、明日か……。よし今日は戦いに備えて今日は宿に泊まって寝よう！」

―― 次の日 ――

「えっとどこだ？街の中央集会広場ってのは……あつた！気合入ってきた〜！」

登録を済ませてから試合会場へと向かう龍二。

「最初の相手はリク・スクレア様です。気を付けてください」

―― 会場にて ――

（瞬滅ってこういう時どうしよう……。武器が無いもんな……。殴る感じでやればなんとかなるかな？）

「フツ。ザコが……。愚かなものよ。地に這いつくばって死n「瞬滅！」……。ぐはっ……。何をしても「瞬滅」……。」

「大口叩いて割には案外弱いな……。でもグロテスクにならなくてよかった〜」

安心しつつもこんな感じで5試合目まで勝ち進む龍二。なかには「こんな奴に勝てるわけねえよ！」とか言ってリタイアする者も……

「なあ、何試合あるんだ？この大会は。」

受付の人に質問する龍二。

「12試合ですね。」

その後も11試合まで順調に勝ち進んでいった。

「次は決勝戦です。相手はライエル・アロスターで、優勝候補です。気を付けてください。」

―― 決勝戦 ――

「瞬滅！」

「出ました！リュウジ・ヤマモトの一撃必殺「瞬滅」がライエル・アロスターに放たれる！！

（フム、中継が流れるようになったのか！おもしれえ！）

「我の盾となり矛となれ！ゴーレム召喚！」

「ヴオオオオ!!」

——ガッ——

「対してライエル・アスロターの得意技 無詠唱召喚魔法ゴーレムで防いだぞ!! となるのでしょうかこの勝負!!」

「うお! 防ぎやがった! やっぱそう簡単にいかねえか……。」

「今度はこっちの番だ!」

ライエルは手を前方にかざして詠唱する

——ハオカー、無限の閃光となりて……——

「ライエル・アスロターが詠唱をしているぞ! 詠唱をすればするほど威力が上がっていく! リュウジ・ヤマモトは一步も動いていない」

「前方に発動せよ! 雷光!」

龍二に向かって行き、直撃した……

「イテッ!!」

「えっ? なんで!? なんでなの!? 雷光雷光雷光!」

「イテッ痛痛痛……。」

（静電気!?!）

「リュウジ・ヤマモトは効いていない! 不死身か? 強い! 強すぎるぞ!!」

「なんか痛いなあ。アレって魔法か?」

「そうだけど……知らないの?」

（魔法キター—— (@A@) /）

「私にはゴーレムがいるから負けることはないわ!」

（確かにそうなんだよな…… あっそうだ!）

「いや、それが終わるんだよね♪」

——ッ ドゴオオオオン——

「ゴーレムが壊れた!? 何をした!?!」

「いや、助走つけて飛び蹴りして、壊しただけだよ。」

「ふざけるな! 一瞬で人間がゴーレムを破壊できるわけがないだろう!」

「いや、でも現に出来てるし……。こんなに速く走れるから俺、こんなこともできるのね♪」

――・・・ツドン――

龍二はライエルの目の前に行って首筋を軽く殴って気絶させた・・・
「リュウジ・ヤマモトが勝った」優勝者はリュウジ・ヤマモトだ！
リュウジ・ヤマモトには賞金360万カインと、この「ラドウピラス」が贈呈されます！

「ん？ 余裕だったな……。疲れたな。ふあああ、眠い……。」「とりあえず360万カインとラドウピラスがを手に入れた。」

―― 次日の日 ――

「んーと、今日はどうしようか……。そーいや大会の最後に使った技に名前付けていなかったな……。よし瞬戮でいいや。」

こんなかんじで龍二は「瞬戮」と言う名前に決定した。

何となく外に出てみると……。鎧姿の人が目の前を通った。

（うん、メルヘン！ オレも武器と防具買わなきゃな……。あ、そうだ！ ラドウピラス貰ったんだった！）

というわけで、ラドウピラスをつけてみると……

「うおお！ なんかすげえ！」

（体から何かが溢れてくるみたいだ！ よし！ この格好で行こう！）
てな感じで武器や防具を買いに行く龍二……

「んーと、ココどこ？」

歩き始めて10分もしないうちに迷子になった。すると近くに蒼い屋根の建物があった。

「お？ あれ防具屋かな？ よし、入ってみよう」
中に入ってみると意外と清潔だった。

「いらっしやい、ココを見つかるなんて珍しいね。誰の紹介かい？」

「いや……。迷っていてついたところがココなんです。」

「そういうことかい。よし、ここを見つかることが出来たご褒美だ。何か好きなのを持っていくがいい。」

「ラッキー！おばちゃんありがと♪」

なんかしっくりくるのがないのか、探していた龍二

「・・・！おばちゃん、これ頂戴！」

龍二が選んだのは赤と黒でコーティングを丁寧にした、鎧というより、私服に似たものだった。

「これが欲しいんだね？はいはいどうぞ。」

早速着てみることにした。

「うん！かっこいいぞ！おばちゃん、ありがとう！」

店を出てみようとしたら、一人の少女が入ってきた。

「きゃあ！」

「おっと！ゴメン、大丈夫？」

見たことあるような女の子が・・・

「あれ？えっと確か・・・ライエルさんだったけ？」

「大会の時の・・・リュウジさんですか？あっそうだ、これからどうするんですか？」

「えっと、旅にでるよ。」

「私もついて行っていいですか？あの人を助けるためにも・・・強くないといけないから！」

彼女は深い思いを抱いていることを察した龍二は、

「わかった。これからの旅でお互い頑張ろう！」

「はい！！ヨロシクです。お母さんいいよね！」

「はいはい、気を付けてね。たまには帰ってきなよ！」

「はい♪」

「えっと・・・ライエルのお母さん・・・ですか？」

「ん、そうだけど。とりあえず龍二君だけ？ライエルを頼んだよ！」

「はい！じゃあライエル、ヨロシクな！そういえばココでなにか買わなくていいの？」

「ああ、そうですね。じゃあ、このピアスと旅に出るから無限ポケットも1つちょうだい！」

「無限ポケット？無限にアイテムを入れられたりするアレ？」

「はい、そうですよ？」

（ゲームみたいだ・・・この世界は面白いな・・・）

「あいよ！ラドウピアスと無限ポケット2つだね！10万カインになるよ！」

「自分の娘からお金を取るなんて・・・。」

「冒険者になったんだろ？私は冒険者には皆平等だよ。」

「・・・じゃあ、おばちゃんオレにも無限ポケット頂戴。オレがおごるよ！」

「え！いいんですか！でも・・・。」

「大丈夫だってこの前150万カイン手に入れたし！」

ライエルの頭を撫でながら言う龍二・・・

「あう・・・アリガト・・・。」

顔が赤くなりながらも、お礼を言うライエル。

「そういえばオレの事、龍二って呼んでいいから君の事、呼び捨てで呼んじゃダメ？」

「ああ、いいですよ♪では改めてヨロシクです。」

「ん、ヨロシク。」

ライエルのお母さんは何故かニヤケている。ま、とりあえずこうして初めての龍二の仲間ができた。

「とりあえず、店でしょうか。」

「はい、そうですね。じゃあ、武器を買いに行きましょうか！」

「強くなって帰って来るんだよ・・・。」

誰にも聞こえないほどの小さな声で、だが力強い声で独り言のように、つぶやいた

始めての仲間（後書き）

寒いですね。手が悴んでタイピングが上手く出来ません・・・。

頑張りますから、皆感想ください！

次回は龍二の武器を新しく買います！

では、これからも次回もお楽しみに！

See you next again.

武器と魔法（前書き）

こんにちは

ホントに寒くなりましたね。Jokerは鼻水が出まくりです。

コタツでぬくぬくとしながら昼寝をすることが僕の楽しみとなりました。部活とか意外と疲れるんですよ？

さて、今回は龍二の武器を買い、魔法についてを学びます。

では、第4話スタートです！

武器と魔法

「ん」と武器はどこに売ってある？」

「ココから30メートル程前に進んで右に曲がって突き当たって左の店がいいと思います。結構大きいですよ」

―― 歩いて1〜2分 ――

「ココです」

「あの場所からぴったり32.7メートルだったね」

「龍二さんって細かいんですね」

「そうかな？ まあいいや、とりあえず中に入ろうよ」

「はい」

―― カランカラン ――

「いらっしゃいませ！」

「こんにちわ！ 武器が欲しいんですけど、どこですか？」

「2階になりますね」

「ありがとうございます」

2階に上がっていくとそこはいろいろな武器があった。

「龍二さんってどういう武器を扱うのですか？」

「気分次第かな……。このまえば黒鎌使ってたし」

一瞬しらけた。

「……。まあ、とりあえず何か買いましょう♪」

ココからは好きな武器をみるため龍二はその辺を、ライエルは杖をみに行った。

―― 30分程経過 ――

（ん、これは何だ？・・・よし、これにしよう！）

龍二はその刀に決定した

それは、全体的に強力な何かを感じる刀だった。文字のようなものが刻まれていて日本刀に似ている。イヴォンセイトという武器だ。値段を見てみると・・・

「えっと、0が12個だから・・・15兆カイン!? ムリだな・・・あ、そうだ!」

何かを思いついた龍二・・・とりあえずライエルがいる所へ行ったライエルも決めたようだった。18万カランする杖でこちらには透明の宝石が付いていた。後できいたのだが、レイル・ラディスと言うらしい

とりあえず買いに行った一階に戻ってみるとライエルが言った

「龍二さん、魔法は使わないのですか?」

「使いたいけど、どうすればいいのかわからないし・・・」

「え! 知らないの!? じゃあ、あとで私が教えてあげます!」

満面の笑顔で言われたのでありがとうと龍二が笑顔で返すとちよつと顔が赤くなるライエル

店を出て、龍二が言った

「ちよつと待って。やりたいことあるから」

「なにするんですか?」

「ちよつと武器を呼び出そうとしてるから・・・」

「え! そんな事出来るんですか!?」

「違うよ。女神様から与えられたあと1度しか使えない技だよ! ちよつと危ないから離れて」

ライエルが離れると龍二はある言葉を唱えた

「”イヴォンセイト”」

——ゴトツ——

「すごい! あれ? これってまさか・・・あの10兆カラン以上するあの・・・」

「知ってるの? あの店にあったから欲しいなと思ってね。でも、あ

の技はもう使えないよ」

「知ってるものなにもこの世に1つしかなくて、初代ギルドナイトのSSランクの第一番隊長ですら、喉から手が出るほど欲しがっていた史上最強のイヴォセントですよ！」

「これってすごいんだ」

「まあ、とりあえず魔法を知りたいんですね？ 龍二は素手でもモンスターに勝てるから無限ポケットにイヴォセントはしまっておきい！」

「イエッサー！」

魔法が教えてもらえるとおもい、龍二はテンションMAXだ

「じゃあ、まずは図書館にいったって、魔法の本を借りに行きましよう！」

「よし、走るぞ。何処だ？」

「ココからぴったり北に9km行って西に60メートル先の図書館だよ♪」

「わかった。じゃあ、オレに乗って！ しっかりつかまってね！」

ライエルを背中に無理やり乗せる龍二

ぴったり1秒でついた。ライエルは顔が真っ赤だ

「お、重くなかったですか？」

声が小さく、龍二には聞こえない

「ん、どうした？ 顔が赤いぞ、大丈夫か？」

縦に首を振るライエル。

「着いたことだし、本を借りに行くぞ！」

ということ、10冊程借りた龍二とライエル。魔法の事についての本1冊と召喚系の本が2冊、魔法の本を7冊借りた

「じゃあ、もう今日も遅いですし近くのホテルに泊まりましょう！」

ホテルに着いて食事をしてからすぐに寝た龍二

しかし、ライエルはなかなか眠れずにいた。同じ部屋で龍二と寝るなんて考えていなかったのだ……。初めて男性と同じ部屋だったので、後悔するがすでに時は遅し

（どうしよう・・・。龍二さんは何もしないだろうし。でも大丈夫かな？大丈夫だよね？うん、大丈夫！）
そう考えるとホッとした。疲れのせいかなそのあとは眠れた

―― 次の日 ――

「おはよう、ライエル！」

「おはようございます」

朝起きて魔法が教えてもらえることでテンションが朝からMAXな龍二。全くもって迷惑な奴である。その後、朝食を食べ終えてライエルは言った

「昨日、借りてきた本全部持ってて広いところに行こう！そこで”地の魔法を使って会場を作って、魔法練習をしよう！」

「イエッサー！！早速魔法だ！」

―― 広場にて ――

「ゲフ、大地の力よ、我を守る建物となりて・・・」

―― 大地の会場、前方に発動！！ ――

―― ズズズ・・・ ――

「すげえ！早く始めようぜ！魔法♪魔法♪」

「そうですね。じゃあ、中に入りましょう！」

（中ってこうなってるのか！）

岩でできた扉の向こうには、トンネルがあった。そこを通ってみると大きな施設が整った会場があった。

「始めましょうか。まずは魔法についての本を読んでもください」
魔法の本にはこんなことが書いてあった

―― クズでもわかる魔法についての本 ――

魔法とはいろいろな種類があります。属性は10つで氷・水・火・

樹・土・雷・風・光・闇・神があります。さらに補助魔法やその他の創造・分解・操作・構築・破壊などもあります。人間は、一つもしくはそれ以上の魔法を得意とする者、いろいろな属性を使うことができる者の二通りのパターンがあり、例外でその他の魔法を扱う者もいます。

1. 属性攻撃は、水は火に強いという常識で成り立っています。しかし、火の攻撃があまりに強い場合、逆転する可能性もあります。

2. 闇属性と光属性は、使える者が世界で5人しかいません。闇属性と光属性の場合、魔力の使用量と技次第で変わります。属性攻撃としては、合い打ちになります。

3. 神属性の攻撃は全属性に効果は抜群となっていますが、使える者が極僅かで、世界で50年に1人という割合で使用可能者が存在する可能性があります。

3. 補助魔法は筋肉を一時的に凝固したり体を軽くしたりなどすることが出来ますが、魔法が切れると体に大きな負担がかかりますのでご注意ください。

4. その他の創造・分解・操作・構築・破壊のうち、創造は神の炎と発言すれば想像した神の炎を発現することが可能となります。

分解は魔法その物を分解して無かった事にします。

操作は、物体を瞬間移動させたり、運んだりする事が出来ます。

構築は、実際に存在するものを作ることが出来ます。

破壊は物体そのものを爆発させて破壊させます。

しかし、その他の魔法は大量の魔力を必要としますので、使用する者はあまりいません。

と、まあこんな感じだった。多分クズにはわからないだろう・・・
「とりあえず、使い方を教えてくれ!」

「はい!まず、龍二さんに私の魔力を送りますので、それに似た自分の魔力を感じてください。では、始めますよ」

そう言って龍二の手の上に手を重ねて、ライエルは魔力を送った

「おお！なんか水みたいなのが流れてきて・・・おっ！これがオレの魔力か？すげえ・・・体内を巡るかの如く何かが流れている」

「じゃあ、そのまま感じていてくださいね」

ライエルは装置をどこから取り出した

「龍二さん、この上に手の平を乗せてください」

――ズッガガガガ・・・ピ・・・ピ・・・ピー――

「す、すごいですね。魔力が10億を優に超えています。これじゃ、一日中使い放題でも大丈夫ですよ!？」

「マジで!?オレって天才かも・・・。そういえば魔力を使い果たしたらどうなるの?」

「倒れて1日程動けずに眠ってしまいます」

「へえ、オレってどんな魔法使えるの?」

「ちよっと待ってください・・・」

また何かを取り出した。

「この上にもう一度手の平を乗せてください」

――ヴィヴィヴィヴィヴィー――

「えっと、属性は氷・水・火・樹・土・雷・風・光・闇・神・・・全部ですか!?その他は、創造、構築、操作、分解ですね・・・。意味不明です。あなたは神様ですか?」

「オレ、やべえよ!すげえ!ハンパねえ!」

キャッキャッと騒いでる龍二とその隣で驚きと自分より遥かに上の存在である事実にはショックで仕方がないライエルだった

「じゃあ、次行きましょう。召喚はしたいですか?」

答えはもちろんYESというわけで、仕方を教えるライエル

「まずは、魔法陣を書いて魔人召喚をします。契約を執行して、契約成立するとリングになるので身に着けます。そして、魔人の名を唱えたと召喚できます。教えることはこれくらいです。あとは本を読んで技を覚えて練習してくださいください」

ライエルは”大地の会場”を発動したために魔力を大量に消費して疲れたと言って龍二と一緒に帰った。よほど疲れていたんだろう。

ホテルに帰ってきてはすぐにベットに潜って2人ともそのまま寝てしまった

武器と魔法（後書き）

龍二は全属性を扱うことが出来るなんて最強ですね。

すいません、龍二を最強にしようと思ったら、こうなっちゃいました♪

龍二はあまりにも無敵すぎるので、ちょっと強い奴をちよくちよく入れいきたいと思います。

では、これからよろしくお願いします♪

魔法（前書き）

こんにちはすいません、更新遅れましたへへ； もう少しで正月になりますね！ちよつと早いですが、A H A P P Y N E W
Y E A R ！！

今回は龍二が魔法を使うための特訓をはじめます。
では、第5話スタートです！！

魔法

龍二は夢を見ていた・・・

「・・・てか、なんでアンタがここにいの？ていうか、ココ何処？」

「ゴメンね。この前、言い忘れたことがあってね。えっと、貴方の能力をチートにしておいたから。」

「知ってたけど、なんで？」

「神様にも、神様専用の法律みたいなのがあって、

―― 第192条で人間、及び神族以外の生物を異世界に召喚するためにはその人とその世界に合った力を神の加護として与えるべし――

とかいうやつで力を与えたんだけど・・・力を与えすぎちゃって、私の力の5分の3を貴方に与えちゃったのよ。とりあえず、死ぬことはないと思うんだけど・・・。あなたが死んだら私が法律によって、責任負うことになるから死なないでね！」

「ちよっと待て・・・。オレの方が今のお前よりも強いってことか？」

（今がアイツを殺せるまさかの、でした！ここでのアタックチャンス！）

「ええ、今の私では負けるでしょうね。でも、貴方が私を倒すことはムリ。だって、今の私はこのブレスレットに力の3万分の2万9999を封印しているんだからね」

「・・・えっと、じゃあ・・・世界とか簡単に潰せるのか？」

「ええ、当たり前じゃない」

（さりげなく怖いなあの子・・・）

「っていうわけで、じゃね★ミ」

―― 目が覚めた龍二 ――

目が覚めて爽やかな笑顔で魔法が使えることにまたテンションが上がっている龍二。それに対して、ライエルはまだ眠そうな顔で朝食を食べていた

「わかりました。わかりましたから、落ち着いてください」

「じゃあ、早くやろうぜ！」

「まだ食事中です。ちょっと待ってください」

―― 食後 ――

「えっと、今回はその市民体育館の近くにある武道場へ行きましたよう！」

「本は何冊持っていけばいい？」

「召喚系の本が2冊と魔法の本を6冊持ってきてください」

「イエッサー！走るぞ！！」

―― 武道場にて ――

「さてと、どれを読んだらいい？」

「えっと、これですね」

魔法の本の中から、本を選んだ。その本はくくくカスでもわかる魔法の基礎くくくだった。この前とほぼ同じだった様な気がするが、そこはさておき本の中を覗いてみるとこんなことが書いてあった。

―― カスでもわかる魔法の基礎 ――

魔法は、まず頭の中で想像してそこに思いついた言葉を言うことで発動が可能となります。

また、魔法には、魔力を込めなければなりません。例えばファイアだとすると、マッチやライターの小さな炎を想像します。そして、魔力をイメージします。ドロドロな魔力で膜を作り、そこから魔力を透かして、炎を見るような感じをイメージします。ドロドロとした魔力で、炎がよく見えていれば大きな魔法を発動する事が出来ま

す。よく見えるようにするには、大量の魔力を必要とします。そして、魔法の名前を言うと、魔法の発動となります。魔力を大量に魔法に込めると、大きな魔法か強力で小さな魔法を放つ事が出来ます。人間にはいくつかの属性が使用可能とされていて、使用不可能な属性は、膜で透かして見ると、うねりをあげてなくなります。

こんな感じだったが、やっぱりカスにはわからないだろう

「大体、わかったぞ！とりあえず、その本にいろいろなことが書いてあるんだな！」

「はい！龍二さんのことだから、簡単だと思いますよ！」

「じゃあ、早速やってみよう！」

テンションMAXな龍二。ライエルは、

「私は新しい魔法の試し打ちでもしてみますね！」

とか言って、どこかへ行ってしまった。龍二は、本を読んでは試し打ちをしていた。3冊はとても薄かった。しかし残りの2冊は、とても分厚く一冊500ページ以上は余裕に超えていた。3冊の本には、イメージするものが書いてあった。

――魔法のイメージ方法――

氷・・・氷の塊、氷柱など

水・・・波、雫など

火・・・炎の塊、炎上している物など

樹・・・木、森など

土・・・崖、岩、地面など

雷・・・雷の塊（鋭い塊）など

風・・・嵐など

光・・・光など

闇・・・闇、影など

神・・・リアルな天使など

創造・・・イメージした物など
分解・・・蒸発など
操作・・・操作している自分など
構築・・・物など
破壊・・・爆発など
補助・・・肉体など

というかんじで、とてもわかりやすかった。さらに残りの2冊を読
んでみると、一番最初に書いてあったのは”ファイア”だった
「とりあえず、これから始めるか・・・」

――ファイア――

ポワアと、火の塊が、目の前にあった。龍二は、人差し指を立てて・
・

「えい！」

――ビュオッ・・・ドゴオオオオオン！！――

そのまま遠くにあった的のど真ん中の当てて、壁ごとぶっ壊した・
・。そこにいた全員の人が、龍二をみて、口あんぐりしてた

「龍二さん？・・・なんですかコレ！！どうしたらこうなったんで
すか！？」

「いや・・・。ファイア使っただけだけ・・・。こういう魔法じゃ
ないの？」

「違いますよ！どんだけ魔力込めてんですか！？普通、ライターの
代わりぐらいなもんですよ？」

「スゲェ！オレ、天才かも・・・！」

龍二たちがキャッキヤと騒いでいる時にある男の人がやってきた
「なんだ？あんたは」

「私はギルドナイトのラフェク・ギルといいます。貴方達をスカウ
トしようと思ひましてね・・・」

「ええ！ギルドナイトからのスカウト！？」

「それってスゲェのか？」

「うん！毎年5000人に15人程しか受からない程の超すごいギルドだよ！！スカウトだなんて、今までに10人いたかどうかってくらいすごいんだよ！」

「オイ、ライエルも一緒にいいか？オレはコイツとじゃなきゃ、拒否するぜ」

「その方も一緒にいいですよ」

「じゃあ、入会してみようか」

「やったー！！！！！！！！」

メチャクチャ喜んでいるライエル……。こうやって龍二は初めての魔法を使い、ギルドナイトからのスカウトを受けたのだった……

魔法（後書き）

中途半端な終わりがたですみません（～～；）
誰かお年玉をください！！

あと、感想もください！！

では、よいお年を（＊＾｜＾＊）／

ギルドナイトの基地（前書き）

とても遅れてしまつてすみません！

テストなどで、投稿する事ができませんでした。

今度からはできるだけ、定期的に頑張ろうと思いますので応援お願いします

それと今までは、作者の視点でしたが、今回からはキャラクター視点で行こうと思います。

とりあえず、そうゆうことで第六話スタートです！！

ギルドナイトの基地

ギルドナイトのスカウトを受けた龍二たちは、ラフェク・ギルと共に、ギルドナイトの基地へいった。

（ 龍二視点 ）

なんかスゲエことになった。今日から、そのスゲエところの仲間になった。

ライエルは緊張してるのか、足がガクガクになってる。

「僕だちギルドナイトの基地はすぐに町などに駆けつけることが出来るように、街の近くの森にあるんだ。もうすぐ着くからそれまでの間、簡単な説明でもしておこうか。僕たちはDランクからSSランクまで身分があり、それぞれの絶対条件をクリアすることが必要だ。Dランクはゴブリンを一人で30体倒すことが絶対条件だ。Cランクはケンタウロスを一人で15体倒すこと、Bランクはデビルを10体倒すことかもしれない。ドラゴン1体を二人以上で捕獲または仕留めること、Aランクはドラゴンを一人で倒すことだ。」

とりあえず、めんどくせえ。ゴブリンはクソ弱かったし、簡単にAランクぐらいいけるだろ……。

「そして、Sランクはスフェルドドラゴン1体を一人で倒すこと、Sランクはスフェルドドラゴン2体を倒すことが必要だ。しかし、Sランクの人は世界に20人しかいない。SSランクの人はこの世に10人しかいない。SSSランクってのもあるが、SSSランクは魔王を今までに2体倒した場合になれる。ちなみに、私はAランクだ。」

「私は、ドラゴンを五人でパーティを組んでやっとならせたのに……。やっぱりギルドナイトはすごいですね。ていうか、ギルドナイトの基地って何処ですか？」

ランクの事に興味がないからなんかヒマだな。その辺のモンスター

狩っておこうかな・・・。

「ついた。ココだよ！えっと魔法陣の上に立って、手を魔法陣の中心に置いたら、着くことになっているよ。試しにやってみて！」

「オレからやるぜ。こうでいいんだな！」

—— プツッ ——

「私たちも行きましょうか。」

—— プツッ ——

なんかびっくりした。瞬間移動したゾ！魔法か！？魔法なのかこれは！？

「でもココどこ！？なんでこんなに暗いの！？意味わかんねえし！？あの魔法陣、故障してんじゃないかねえの？」

あ、皆来た。よかったゾ！

「きゃっ！」「おっと！」

二人とも落ちてきたし・・・。

「さてと魔法陣が五つあるでしょ。あの場所の左下↓右上↓左上↓右下↓上↓左下っていう順番で行くと着くよ。」

「じゃあ、今度は私がやりますね。」

ライエルがやってみたら魔法陣から線がでて、星のマークを作った。

—— コオオオオ プツッ ——

「オオ！スゲエ！次はオレがする！！！」

「では、最後に僕が行きましょう。」

—— コオオオオ プツッ ——

着いたぞ。なんか酒屋みたいだ。ていうか、酒臭いな。

「ここが、僕たちの基地です。バーの主人に話かけるとメンバー登録やクエストの注文などが出来ます。あそこにある右端の扉の奥は君たちの部屋です。左端の方の扉の奥には練習したりする広場があります。まずは、バーの主人に話しかけてください。僕は仕事があるので、ここで失礼させていただきます。」

「ん、じゃな。」 「はい、ありがとうございました。」

ギルドナイトの基地（後書き）

久しぶりなんで、ちょっと疲れましたね。でも、頑張るので感想ください。

本文がとても短い気がしますが、その辺は気にしたら負けでお願いします。

次もちょっと遅れると思いますが、これからも宜しくお願いします。

龍二の暴走とライエルの溜息

くライエル視点く

なんか、すごいです。お酒臭い人がいっぱいです……。気持ち悪くなってきました。うう。うう。

「汚え。臭いし。本当にココスゲエのかよ……」

龍二さん、ギルドのど真ん中で言っちゃってますよ。あ、変な男が来ました。うう……。この人も酒臭いです。

「げへへへ。見ねえ顔だな。新入りか？ 姉ちゃん俺と遊ばーぜ！」
うわぁ、ナンパってやつですか。不良A的な設定の人ですね。

「沈め……」

―― デコピン ――

「ぐふう!？」

ちよっとダメなパターンのアレですよ。喧嘩買っちゃいましたよ……。しかも、暴力で返してるし……。いや、暴力なんですか？ あれは……。ていうか、なんでさっきまで、テンションアゲアゲだったのにこんなに冷静なんですか？

「何だい、兄ちゃんの連れかい？ デコピンって意外と痛いんだよ。わかるか。わからないだろうね。お仕置きが必要みたいだな。死ね!!!」

「おっと、馬鹿野郎！ ナックルつけて、殴ってくる奴があるか!!！ デコピンより明らかに強いだろ！」

「そうだな……。とりあえず、闘技場に来い。殺してやるぞ！」

「一人で、俺に勝てんのか？ 何ならお前の仲間連れてこいよ。全員、滅してやるよ。」

「調子に乗りやがって！ その挑発乗ってやるぜ！ 来いお前ら！」
うわぁ、なんかやばいですよ。私は取り残されてますし……。滅してやるってなんですか!？ 地味に怖いです。ていうか、勝手に話

「逃がさん!」

「・・・2・1・0。終わりました?終わってないですね。あと五秒待ちますね。」

あ、なんか飛んできました。人間ですね。えい!

――バーニング――

無詠唱魔法成功!!やったあ!あつ、もう五秒たちましたよね。

「終わったぞ。」

「すごいですね。わざわざ、ジエンガみたいに積んでますね。お疲れ様です。」

もうビックリできませんよ。モンスターを手刀で倒す人ずっと見ててくださいよ。これが当然の結果なのです。

「魔法って、詠唱せずに発動できるんだな。」

「魔力は相当消費するし難しくて、意外と大変です。龍二さんは魔力10億ありますから、結構使い放題ですね。魔法にもありますが、通常の1.5倍の魔力を消費します。しかし、練習してないと調節できずに、自爆します。」

「俺もやってみる!!樹属性でいいかな?」

力溜めてますね・・・なんかな。魔力が見えるんですけど・・・濃度が高いです。あつ、別に呆れたわけではないですよ?あくまで、人の領域を超えてるんだなと改めて実感しただけです。だって、レベルの高い人でもあそこまで魔力は見えませんか?一応、大会優勝候補なのに自信なくしちゃいますよ・・・。

――樹・神・構築――

・・・?なんですか?樹ってもしかして、無詠唱魔法の最低限の言葉ですか・・・。大きな木が出てきました。??・・・私の魔力まで自動的に高まってますよ?

「・・・世界樹!?しかも、無詠唱複数魔法!?!」

イヤイヤイヤ、ナイナイナイ、ムリムリムリ。魔法陣を書いてSクラスの人を生贄にして、出てくるってやつでしょ?教科書に乗ってましたよ?あつ、ココはテストに出ますから暗記しててくださいね。

それにしても、一人で生贄なしの召喚なんて・・・しかも、無詠唱ですすよね。さすがです・・・。

―― バタツ ――

「・・・？ 龍二さん？ どうしたんですか？」

魔力は・・・感じられない・・・。生命力は・・・ありますね。

「う、う、姉ちゃんか？ ガキは・・・どうした？ 死んだのか？」

下種が生きてました。あつ、ちがいます。変な人でした。

「魔力を使い切りました。その世界樹を召喚した後に・・・。」

「ふおっふおっふお、世界樹を召喚できる奴なんて、そうそういいえよ。生贄は？ 何処だ？」

あつ、マスターの人だ・・・。あ、下S・・・変な人を倒しちゃいました。仲間なんですよね？？ まあいいや。それにしても、生贄なしの召喚なんて信じるわけがないでしょ。マスターの目が怖いんです。キラッって感じじゃなくギロッって感じで光ってます。目力すごいですね。

「生贄なしか？」

「はい。って、え・・・？ なんで、わかるんですか？ ていうか、ありえるんですか？」

あ、わかったんだ・・・。すごいですね。

「このギルドの裏で動いている、表ではSSSクラス並みの力を持った奴が一昨日にやりおった。」

「すごいですね。一人でですか？ SSSクラスなんてあるんですか？」

「む・・・。質問攻めというやつか。んと、SSSはないがそれくらい力だということだ。一人でやりおったぞ。世界にこれくらいのやつが2人もいるとはの・・・。世界樹の実がなっとなるじゃろ。嬢ちゃん、あれをとってコヤツに食べさせろ。」

・・・コヤツ？

「はい。一つでいいですか？」

「いや、コヤツは魔力限界値が10億はあるから、10個じゃな・・・

・。はあ、コヤツは世界樹の実を一人で全部食う気か。勿体ないの。実をとったら、この世界樹は壊せよ。ここにあっても困る。」

「はい、10個とりました。あとは、破壊ですね。神よ、この一撃に全てのちからを込めんとし力を我に与えよ。」

―― 雷 ―――

壊れません。すごいですね。世界樹って。

―― 操作 ―――

「ホレ、起きろ！」

わあ、操作で龍二さんのお腹に世界樹の実をテレポートしちゃいましたよ。

「う……。」

「嬢ちゃん、世界樹は壊れたか？」

「えっと、無理でした……。」

「うむ、当然じゃの。分解でしか壊せないしの。」

壊せないの！？では、何故、私に？

「コヤツは、分解を使えるかの？」

「あ、はい。龍二さん、起きてくださーい。」

ムウ、起きない……。

「起きないと攻撃しますよ？」

―― 氷 ―――

「マスター、凍らせちゃダメですよ。こういうときは水に雷で、ビリビリって。」

「お前ら、人で遊ぶな！」

「ああ、起きたんですか。この木壊してくださいよ。」

「”ああ”じゃねえだろ。ライエル、俺の扱い方が酷くなってね？いや、まあまあじゃねえよ。あれを壊せばいいんだな。」

―― 分解 ―――

「おお、壊れた。すごいすごい。世界樹ができたと思えて来てみれば……。お前誰？なんで、そんなに殺気だしてんの。」

「知らない人を警戒するのは当たり前だ。貴様こそ誰だ。」

「力づくで俺の口から吐かせればいい。フツ、無理だr!!ぐふう……。不意打ちはやめrぐはっ……。ちょ、ちよっとタンマ！」

うわぁ、不意打ちしまくってますね。でも、よくあの人は死にませんね……。

「♪」

「口笛で誤魔化してるし!!最悪だなテメェ！」

――構築・操作――

うわぁ……。拷問用具を作って、あの人に設置しましたよ。

「わかった。わかったから、やめてくれ。拷問で、あんたドSやな。ああ、ゴメン!!謝るからスイッチを押すな!!」

「やめたれ、お前が殺したらワシがお主を殺すぞよ。カズヤも悪ふざけはその辺にしとけ。お前が死ぬことはまずない。」

マスターの殺気がハンパじゃないです。あ、龍二さんが殺気を抑えました。マスターって何者!?

「ああ、悪かった。俺は、田中和哉だ。SSクラスで、出身地は日本。って、その顔は日本を知ってるって顔だな。日本人か？」

「ああ、女神が俺をレポートしてきた。」

「お前も女神か……。」

「あの、SSクラスって、この人のことですか？」

「ああ、情報によると、地面を殴ると軽くクレーターができるっていうな。」

「お前も……。ってじゃあ、貴様も力の分量を間違えられたんだな？」

「ああ、俺もお前も仲間だな。」

「マスターもだろ?力を隠すのはやめろよな。マスターも神の力を授かったものの一人だ。だが、力がハンパねえがな……。」

「うむ、魔力20億で属性は全使用可能だけど、わけありで闇と補助以外しか、使えないがな……。」

何の話か全く理解ができません。急に現れた人が、龍二さんとわか

りあってます。マスターもすごいですね。話についていきません。

「そいや、お前の名前はなんだ？」

「山本龍二だ。氷・水・火・樹・土・雷・風・光・闇・神・創造・構築・操作・分解が使える。」

「おお、俺もだ。魔力は10億前後だ。マスターは？」

「ワシは成清聖仁じゃ。向こうの世界では、教師をやった。こやつのかな・・・。」

皆凄すぎて話がわかりません。一応魔法は1種類使えるだけでも凄いですよ？大会優勝候補の私ってなんなんだろう・・・。今度、無詠唱魔法の練習しとこ・・・。はあ・・・。

召喚獣との契約

（聖仁視点）

また何かバカ凄いい奴が来おった。無茶苦茶じゃろて。SSSレベルが儂もいれて3人か……。魔王倒せるかも知れんの。そろそろ儂の金も無くなってきたし、狩りに行こうかの。

「その女子は何処から来たのじゃ？」

「ラシリルです。」

「えっと、魔王の出身国だと言われているトコかの？」

「はい……。」「

「ん？どうかしたかの？」

「いいえ、大丈夫です。」

「そういや、キミ召喚何かできる？」

「あ、はい、一応」

ほう、この女子召喚できるのか

「何が召喚できるのじゃ？」

「えっと、ゴーレムだけです」

ああ、ま、一般人では当たり前だろう

「龍二！お前は？」

「なんも持ってねえ」

「俺もだ。勝負しねえか？召喚契約して、そいつらで戦わせて買った方が今日の昼飯奢りね」

「上等だ、コラ！！」

喧嘩腰になっとる……。・

「ほれ、契約書じゃ。これを使えば契約したモンスターや魔人はこの本に載る。これを持ち歩けばリングなどを付けずとも召喚できるという代物じゃ。あとで120万ずつ貰うからの。ああ、そうじゃ

った。弱いモンスターに莫大な魔力を注ぐと大量の魔力が必要な魔人にも負けないくらい強くなれるから覚えとけよ」

フォッフォッフォ、儲けたじよ。

「あれ、そんなにするんですか？」

「いや10万ぐらいだったと思う」

「ボッタクリですね」

「まあそういうなて、お主にも一冊プレゼントしたろう。金はいらん。お主のゴーレムを召喚して本でゴーレムに触れるといい」

「やったー。ゴーレム召喚！えいっ！」

「ありがとよ。軽くてこのサイズ。これをたったの120万でご提供させていただきます。ただし、今から速いもの順で1名様限定です」

「ジャパネ○トたか○風に売るんじゃない！全く召喚本やるからさっさと始めんか！」

くライエル視点く

私もあとで何か召喚しようかな。あ、魔法陣描いてます。えっと、あの魔法陣は見たことがありますね。

「『私の血により目覚めんとす。私の力となりしものよ。私の一部となれ。』」

ここまでは普通ですね。まあ、召喚に血を必要としてる時点でおかしいですけどね。

「召喚！リアラウス」

「召喚！インリルム」

わあー二人とも上級魔人召喚してますよ。とりあえず、私の今の表情を顔文字で表わすとかこんな感じですよ↓（。。。）

まずは、龍二さんの召喚魔人から見てみましょう。まず、顔は幼いですね。目は血のような真っ赤な色です。身長は・・・やった、私

より低いようです。髪の色は黒で顔は白いですね。全体的に子供みたいですよ。女の子みたいです。

「我の名はリアラウス。その女、我を子供扱いするな。それに、我は女ではない。男だ。」

あ、心読まれてるっぽいですね。！！・・・ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ。そんなに睨まないでください。恐いです。

「で、我を呼んだということは我と契約するためか」

で、から始まるセリフ来ました。古いですね・・・ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ。ホントに恐いんですから。

「注がれた血はお前のだな。ということは、お前が我を呼んだな。我との契約条件は我を倒すことだ」

「オーケー、わかったお前を倒せばいいんだな」

「そう簡単にはいかんぞ。我との契約に成功した者は、未だ3人しかおらん。速かれ遅かれ散るお前の命、ここで散るがいい」

「こっちも昼飯代が掛ってんでね。負けるわけにはいかないんだよ」「こちらから行かせてもらおうぞ」

―― 雷 ―――

わあ、いきなり無詠唱魔法ですか。ハイレベルです。ていうか1撃に込める魔力が肉眼で見えるほど濃いんですけど

―― 分解 ―――

「ほおー、分解を使えるのか。じゃあ・・・これはどうだ！」

―― 火・闇・神 ―――

えっと、これはどこかの魔王さんが使ってた”暗神の黒き炎”で通称”滅ぼしの炎”だったと思います。教科書に載ってました。

―― 分解・不可能 ―――

「チッ」

―― 操作 ―――

「アイツにとんでいけ！」

―― ドガアアン ―――

「くっくくくくく。面白い、お前の力は大体わかった。ウォー

ミングアップも終わった所で・・・本気でいくぞ!」

（和哉視点）

あっちはもうやってるな。さて、どうやってこのお嬢ちゃんを倒すかなんだけど、メツチャこの子俺のタイプなんだけど・・・。絶対手に入れるぞ。そして、俺の嫁に・・・。

「あんた、考えてること最悪。早く終わらせよ」

――構築・闇――

ん・・・いきなり周りが見えなくなったぞ。・・・これは”闇のドーム”だな。めんどくせ。

「ねえ、こんなことせんで、俺の嫁にならないか」

「嫌だね。死んでもお前の嫁なんかなるもんか。どうせ見えぬのだろう。潔く死ね」

うわぁ、即答かよ・・・。傷ついたわぁ。いいもん、ツンデレって思っとくから!にしてもこのドームどうしようかね。本気で魔力解放したらドームにヒビでもはいるかな。

――ズズズ・・・――

「ふうん、結構魔力あるんだ。でも見えなきゃ意味がないよ」

――構築・闇――

「闇の迷路、完成!これで出られないよ。出口は一応あるから脱出できたら、相手してあげる。」

んーと、闇で見えない壁だらけだ・・・。壁に毒とかあるから迂闊に触ると死ぬな・・・。さて、どうしたものか・・・!!

「壁があるなら壊せばいい・・・」

――光・分解――

これで何とかなるな・・・。あっ、一応説明しとくけど分解は複数魔法の場合、それに対となる属性を付加させて分解するか、濃密度の魔力を込めた分解じゃないと解けないから

――ズズズ・・・――

「お、そろそろかな。やっと出れた」

「む、やるな。久しぶりに楽しめそうだ。さて手合わせ願おうか」

――構築・ダークサイス――

「じゃ、俺はこいつでいこうか」

――構築・ナイフ――

さてとまずは、ナイフでも飛ばすか。ていうか素手での技がほとんどト○コに似てんだよね

「はああああ・・・」

溜めるなあ・・・。攻撃力高そーだな。魔力高すぎて魔力に触れそうだし、ちよつとシールド展開しとこ

――火・雷・氷――

って、これはヤバイぞ・・・。

「シールド展開」

――構築・操作――

俺が考えた魔法系対策のシールドだ。魔力を込めればその分盾の量が増える。1つの盾にざっと300ぐらいの魔力を込めた攻撃なら防げる。ただ、魔力の消耗が激しいんだよ。1つの盾に350ぐらいの魔力込めるからな。普通のやつじゃ、即効ぶっ倒れるだろな・・・。

――ズガガガガガガガン――

無茶苦茶だろ。何本打ってきてんだよ。さすがだな。でも、こっちもそろそろ攻めなきゃな。

――土――

土台を作って

――水――

水分を含ませて

――樹――

敵の周りに木を生えさせて

――神――

成長させて

—— 火 ——

火をつけて

—— 風 ——

風を送ることで火を強くする。すると中に閉じ込められた者は酸素を失い・・・倒れる。そして勝利が確定する

「これ、めんどくさいからあまりしないけど、魔力じゃ勝ち目がなさそうだから・・・ゴメンネ★」

—— 神 ——

「俺の勝ちだ。とりあえず治癒しといたから、この本の中にいろよ」
結局ナイフ使わなかったし・・・。

（龍二視点）

本気じゃなかったか。しかも無傷かよ・・・。わかってはいたけど、強いな・・・。

—— 風 ——

「この程度の技で我を倒せると？」

—— 水 ——

水で返してきやがった・・・。水だと風は重量で負けるから、避けるしかないか

「我を召喚したのが間違いだったな」

あいつはどうやってんだ・・・。土に木・神・火・風で窒息か・・・！！・・・オーケーオーケーわかった。

まずは地面を殴って・・・

—— ドゴォォン ——

クレーターを作る。

「当たっていないぞ。こんなものかお前の力は・・・。お前も私の全力に足らんあいてだったか」

一一一 水 一一一

水を作り

「防ぐまでもないな・・・」

一一一 雷 一一一

水を電気分解して

「何処を狙っている！」

クレーターのうえに上がって

一一一 神 一一一

重力を大きくして敵を動かさず

一一一 火 一一一

電気分解した水素と酸素に火をつけて爆発を起こして敵に当てる。

自然現象によって・・・倒れる。そして勝利が確定する

「やっとなんて。強いな・・・」

「うゝうゝ・・・」

「生きてたか・・・。よかった。」

一一一 神 一一一

「治療してるから完治してから、この本に入れ」

（聖仁視点）

やりおった。あ奴ら・・・。上級魔人と契約しおったか・・・。さて、どちらが勝つかこれもおもしろいの・・・。フォッフォッフォ、魔王の部下を2人従えたか・・・しかし、この程度じゃ、魔王には勝てんのお

「なあ、戦うのは明日にしねえか。今じゃ俺とお前も含めて全員疲れてるだろ。どうせやるなら本気でやりたいからな」

「ん・・・いいよ。明日ココに10時に集合だ。明日までに召喚獣を増やすのもいいだろう」

結局明日か・・・。二人とも科学の応用はいいが、あれはあまりに

もセコかろうて・・・爆発に窒息って可哀想じゃろ・・・

「さて、もう遅くなったし儂は帰るとするか。ココは勝手に使ってよいからな。明日を楽しみにしてるぞ」

フォッフォッフォ、明日が楽しみじゃ

龍二の召喚獣

（龍二視点）

さてと、この後はどうしようか……。あ、そういやおっさんが下級のモンスターでも魔力を込めれば、強くなれるって言ってたな・

・
「おっさん、この本貰っていいか？」

「ああ、召喚書か。別に構わんぞ」

これって召喚書って言うんだ……。とりあえずお礼だけは言っておいて、後でライエルに詳しく訊いておこう

（ライエル視点）

ていうか、なんでまた同じ部屋なんですか！

「ライエル、上級魔人を召喚するのと、下級魔人に大量の魔力を込めて召喚するのではどちらが効率がいいか教えてくれないか。」

「結構具体的に訊いてきましたね。」

軽く心の叫びをスルーされましたね……。まあ、聞こえるわけありませんが……

「いや、明日はどんな奴にしようかと考えててね……」

「普通は下級魔人に大量な魔力なんて与えませんのでわかりませんね。図書館で調べた方がいいと思いますよ」

「んじゃ、行ってくるけど前に行った図書館でいいんだよね？」

「はい、ギルドの闘技場で契約とかはしてくださいね。龍二さんは桁はずれですから」

やっとギルドを堪能できます？ 最初は最悪（あのお酒臭い人とか特に）でしたけど、初めてのギルドですよ！ しかも、あの有名なギルドナイトの！！ テンション上がっちゃいますよ？？

（龍二視点）

さてと、歩いてる時間はないな・・・走って行ってくるか・・・

―― 風・構築・操作・オート ―――

これで魔物が襲ってきたとき自動でウインドカッターが出るだろ・・・

・
約1分ぐらいかな・・・さてと、行くか！

―― 1分後 ―――

あと少し・・・あ・・・3秒過ぎてる・・・糞つたれが・・・

まあいいや！

さてと本は・・・あった、あった。」

―― ザコでもわかる召喚方法 ―――

まず、召喚書が必要です。召喚書から召喚獣を1体選択し、その魔人を呼びだす為の魔法陣を描きます。その後、上級魔人の場合は、召喚する主となる人の血が必要となります。召喚獣と契約した後にリング化か契約書に召喚獣が載り、召喚する時に魔力を込めます。尚、召喚獣は一度倒されても、何度でも召喚すれば蘇ります。召喚獣は主に、魔人族、獣人族、エルフ族、魔物族、龍族などがいます。また、極稀に神族を召喚できる人もいますが普通は人間の魔力が召喚する時点で大量に消費するので、召喚する前に倒れる人がとても多い様です。昔のSSSクラスの者が神を召喚できたという説があります。詳しく種族について説明するとしたら、←のようになります。

魔人族・・・人間の言葉を理解することができる。

魔力、筋力ともに発達している。

人間と仲が悪く契約したら、主を襲わなくなる。

しかし、強力なので契約する時に死亡するケースが多い。

獣人族・・・人間の言葉を理解することができる。

魔法は全く使えないが異常に筋力が発達している。
契約にあまり魔力が必要ないのが特徴で、動きが素早い。

範囲魔法を使うと絶対的にあたるので簡単に契約することができる。

エルフ族・・・人間の言葉を理解することができる。

魔法に異常に発達しているが、筋力がとても弱い。

魔法をよく使うため1つ1つの攻撃に時間が掛かる。

剣士などが素早い攻撃をすると避けることができず簡単に倒せる。

魔物族・・・人間の言葉を理解することができない。

全般的にとっても弱い。初心者向き。

しかし、大量の魔力を与えると、人間の言葉を理解することができるようになる

龍族・・・名前の通り龍である。人間の言葉を理解することができるが、非常に強力である。

鱗はとても固く、魔法や剣などはあまり通さない。

召喚できるのも極僅かで、とにかく強い。

神族・・・一言で言うならば無茶苦茶である。

とにかく、召喚したら魔法陣をすぐに消して帰っていただきたい。

ちなみに、神族は龍を飼っているという説がある。

このような感じです。ちなみに魔人族を召喚するのと同じくらいの魔力で魔物を召喚した場合、魔人並の強さになります。魔人（最低召喚魔力100）に100ほどの魔力を与えて召喚するのと魔物（最低召喚魔力10）だと、魔物が強くなります。これは、召喚獣に公式というものがあり、種族別に表わすと←のようになります。

（yは能力となり、xは魔力を表わす。またあくまでこれらは平均）
魔人（最低召喚魔力100）・・・ $y \parallel 2x + 300$

獣人（最低召喚魔力40）・・・ $y \parallel x + 400$ （力）
 エルフ（最低召喚魔力70）・・・ $y \parallel x + 400$ （魔）
 魔物（最低召喚魔力10）・・・ $y \parallel 5x + 100$
 龍（最低召喚魔力1億）・・・ $y \parallel 10x + 1万$
 神（最低召喚魔力50億）・・・ $y \parallel x + 3万$
 御覧の通り龍族と神族は桁違いです。間違っても召喚はやめておきましょう。

んと、まあ・・・やっぱりカスに分かるわけがない。でも決まったな・・・。俺は魔物と龍を契約しておこう。え？なぜ神族と契約しないかって？いや、あの女神が出てきたらホント手に負えないですよ。だからだよ。さてと、ギルドに戻るか・・・。今度こそ、ぴったりに1分で到着するもんね。よいい、ドン！

一一一 1分後 一一一
 あと1秒・・・キタアーーーー！ジャスト1分！！えっと闘技場って・・・あ、あれか。さて、魔法陣描くとしますか！

一一一 魔法陣を描くこと5分 一一一
 魔物の魔法陣完成！

「召喚！コキツネ」

「ZZZ」

「寝てるし・・・。」

ちょっとだけ触ってみよ！モコモコしてる・・・。起きないかな・・・。モコモコしてる・・・。契約できないよ・・・。モコモコしてr！！起きた！！

「フーッ！！」

ん？威嚇は猫？体は狐だけだな・・・。ちょっとだけ傷つけて、回復させてあげよ。次あるし・・・

一一一 デコピン 一一一

「うみゅっ」

あ、終わった。早っ。デコピンだけなら回復はいいや。契約終了！
さあ、次行ってみよう！そういや俺って全くなって言ってもいい程魔力使ってないんだよね……。龍行ってみよ！

――魔法陣を描くこと10分――
やっと完成！龍の魔法陣って難しすぎでしょ！3回も間違えたしま、いいや

「召喚！ブオーアズ・ホワートドラオン！」
って、やっぱり出てくるわけないよね……。まあ、わかってたけど。魔法陣すらまず違うもんね……。

「召喚！ブル○アイ○アルテ○メツ○ドラオン！」
すいません、ふざけました。深く反省してます。次はちゃんとしま
す。ハイ、ごめんなさい。

「召喚！双龍！」
双龍ってのは、y120x+2万のごっつい奴で……。ほお、2
体の龍が合体したっぽいから能力が2倍なわけね。

色が白いな……。鱗は純白とでも言っておこうか。牙もごっつい
こと！

「さて、龍！契約条件は？」

「手を出せ。余の手にお主の利き手をおいて、魔力を全部出し切れ」
あ、それだけ？じゃ、お構いなく……

「はあああああ！！！」

「！！……人間がここまで魔力を出せるとは、魔法もほとんどが
使えるのか……。余を召喚しても尚、この魔力の量とは素晴らし
い！！いいだろう。面白い……。お主が余の主となることを認め
よう」

「お。ありがとよ。」

「フッフ、あそこまで魔力を出しておいて、しゃべる気力があると
はな……。さすがだ。」

なんか、簡単だったな……。けど、疲れた……。寝よ……

―― 龍二の夢の中 ――

ん？お前はリアラウスだっけ？なんでここに？

「我とお前が契約をしたからだ！」

なんで聞こえてんの？

「我がお前の頭に直接話しかけているからだ」

あっそ。んで、俺と契約したからって何故ここにいの？

「新しい名前を貰わなければならないからだ」

わかった。えっとお前向こうで何してた？

「向こうとはお前と契約される前のことだな？魔王の護衛団の1人であるジクエル様の部下だった。部下の中で一番我が強かったのによりによって、お前に召喚されたんだ」

へえ。、お前強かったんだ。あんなのが、お前らの世界にはゴロゴロいると思っていたんだけど・・・

「我並みのがゴロゴロおったら、人間界はとくにつぶれとるわ」
あ、そっか。

「ところで、早く名前をくれんか後で龍と狐が待っておる」

あ、マジで。じゃあ、お前はリアスね。

「ただ短くしただけだろ。まあいいだろう。では、これより我はリアスなり。さらば」

あ、消えた。っと龍が来た。

「余の名を貰おうか。」

そうだよな・・・龍じゃ固いもんな・・・。じゃあ、お前はユウ。優しい男っぽく名乗れ。その古い言い方はやめろ。

「優しい男？？じゃあ、これより、僕の名をユウです。じゃね」
うむ、いい感じだ。

「ボクの名前もほしいです!!」

あ、お前喋れたんだ！お前は明日から俺のペットだ。理由は癒されるから。名前はミュー

「はいです。バイバイです」

召喚獣の戦い

「ライエル視点・朝起きて」

ふあゝ．．．眠いです。そういえば、龍二さんどうだったかな？どうせ、また龍とかトンデモナイものとかと契約してるんでしょ．．．。私も誰かと契約しとこ．．．。鎧とかに着替えとかなきゃ．．．。「ライエル、いつきまーす！」

はあ、一人で何やってんだろ．．．。虚しいです．．．。まあ．．．そろそろいきますか。そういえば誰にしようかな．．．。考えながら行こう。えっと、私は攻撃方法は、剣と魔法両方使えるんだよね．．．。まあ、自慢ではないですけど！でへへ．．．。この前は、ゴーレムだったから．．．。今回は獣人族か、エルフ族にしとこ．．．。んゝ、ゴーレムは物理防御に強いんだけど、魔法防御がね。すっごいぐらい弱いんだよね。だから、魔法用にエルフ族にしとこかな．．．。エルフ族でもいいっぽい種類があるんですよ。一つの属性の魔法にとっても強いタイプとか、全般的に技なら使えるタイプとか。あ、闘技場についてちゃった。聖仁さんがいます。

「おはようございます。」

「うむ、おはよう。お嬢ちゃんは何しにここへきたのじゃ？」

「召喚契約しようと思って．．．」

「うむ、農も暇じゃし手伝おうかの．．．」

え！！ラッキー！めっちゃくちゃ強いひとゲットです！SSSクラスでしょ！？一撃でいけるんじゃないんですか？

「いいんですか！？」

「お嬢ちゃんさえ良け」「ありがとうございます！！」．．．うむ、元気がよろしい」

じゃあ、私が召喚で精いっぱいのエルフさん召喚しちゃいますよ！！

――魔法陣を描くこと5分――

「私の力となりしものよ。私の一部となれ。召喚！ヴェルク」

つつ・・・疲れた。あと、残り魔力は200ぐらいですかね

「ん・・・。眠たいのに。もう誰だよ、こんな朝早くからオイラを呼ぶのは」

きゃー！可愛い可愛いヤバイこれマジでかわいすぎ！！え、なんでそんな興奮してるかって？いやいやいや、あれ見たら興奮しますよ。耳はとんがって、髪は紅です。目も紅で牙がちょっとだけ尖がってます。何よりも小さいです。子供みたいです！

「オイラは、眠いんだ後にくれな「ダメです！」・・・わかったよ。僕との契約条件は僕を倒すことか僕に君の力を示すことだよ」

「はい！わかりました。じゃあ、聖仁さん頼みましたよ！」

「お主は戦わんのか？」

「嫌です。そんな可愛い子を虐めるなんて私にはできません」

「自分の召喚獣じゃろて。まあ、よいわ。その赤髪、儂が相手じゃ」

「お前が俺の相手か。少しは楽しませてくれよ！」

「ふおっふおっふお、儂の相手になるかな？」

「爺さん、あんた死ぬかもよ」

――火――

「こんなナマクラ弾、当たらんわ！」

――火――

火専用のエルフに火で挑むって、確実に喧嘩売ってますね。まず、エルフ族に魔法で対抗しようってどこもおかしいでしょ。ていうか・・・

「聖仁さん！闇と補助しか使えないんじゃないんですか!？」

「いや、儂は闇をよく使うから、闇属性魔法の魔力消費量を燃費よくしたんじゃないよ。そしたら、他の属性の魔力消費量が大量に必要なってな。燃費が悪いんじゃないよ。じゃからあまり使わんようにしと

ったんじゃよ。」

「じゃあ、何故、今使っているんですか？」

「いや、この程度の奴ぐらい同じ属性でも余裕じゃろて。じゃからじゃ」

「ハンデのつもりかい？ていうか、君、本当に他の魔法使えるの？出してみなよ。どうせハツタリだろ」

—— 闇 ——

「ぐあ……。」

うわあ……。闇で出来た手がちっちゃい子を掴んで締め上げてます。闇の手大きいです。なんていうか、年寄りが闇の手を使って子供を締め上げるってシュールな光景ですね。

「ふおっふおっふお、その闇の手はお主の魔力を吸い取り儂に与えられる。まだまだ修行不足じゃい」

—— 火 ——

|| ボンツ ||

「はあ……。はあ……。はあ……。君強いね。でも、もう効かないよ。その程度の闇、僕の炎で焼き消してやる。はああああ！！！！

|| ラー、ラーの太陽を造り出す我に、月すらも焦がさんとす力を与えよ ||

—— 灼熱の太陽 ——

「ふおっふおっふお、ラーの太陽か。魔力は3000程度か……。じゃあ、儂も力を出すとするか。これが最後じゃ……。！！！！」

|| アポローン、全てを灰と化すその力を儂にも、ちと分けてくれんかの。なーに、すぐに終わる。爆発だとうるさくて敵わんから、音は小さく頼むぞい ||

—— 炎火爆静 ——

えゝえ！！！！神様に話しかけてるし！！！！ていうか神様に注文付けてるし！！あの爺さん何者だよ！！しかも、ラーに対してアポローンで戦ってるし！！太陽神対太陽神ってなんだよ！！てか、私のキラ崩壊してるし！

「それでも、まだやるのか？お主でもわかっておるじゃろ。儂の魔力はざっと3万ぐらいの魔力を込めていることに……。お主の10倍ぞ。勝ち目はお主にない……。終わりじゃ。何よりも儂はまだ今の炎火爆静の50倍ぐらい魔力を込めれる」

「わかったよ。その女の子の召喚獣になればいいんだろ。その女！俺の最低召喚魔力消費量を10ぐらいにしとくから。暇な時気軽によんでくれよ。じゃな……。あ、そういえば名前くれよ。」

「あ、はい。じゃあ、フレイです。フレイムのフレイです。」

「わかったよ。召喚書ぐらい持つてるでしょ。オイラ疲れた。」

「はい、お疲れ様です。」

Ⅱ スツ Ⅱ

「ふおっふおっふお、儂もまだまだ若い者にわ負けんわい」

いや、実際には聖仁さんは、結構20代に見えるんですけどね

「やるじゃないか、おっさん。おっさん強かったな」

「あ、龍二さん。おはようございます。龍二さんは誰と契約しましたか？」

「後からのお楽しみってことで。おっと和哉も来たぞ」

「ういーす。皆早いっすよ。さてと、龍二！今日の昼飯賭けて勝負だ！」

「召喚！ユウ」

誰！

「召喚！フェルトス」

だ……。誰！

「ん、龍族か……」

りゅっ龍！？あの、教科書に載ってた奴！？

「そういうお前は、獣人族じゃねえか。龍に勝てるのか？」

「昨日、お前が龍召喚してるのを見てな。軽く9億以上の魔力使ってたんだろ？召喚に2億、契約するために7億6000ぐらいかな」
9億って単純な計算だと、バーニングが魔力消費量20ぐらいだから、えっと……。4500万発ぐらい撃てますね

「俺は、昨日召喚魔力消費量の400しか使ってない。お前、まだ完全に魔力回復してねえだろ。1日の魔力回復量は3000ぐらいだからな」

「フフッ、それでも龍は鱗が硬いから、獣人族に負けるわけがない。」

「いくら龍でも魔力をかけなきゃ強くはなれねえ。お前の龍に掛けた魔力は6000だろ。それで龍が召喚できただけでも凄いことだがな……。俺がこいつに掛ける魔力は9億ぐらいだ」

「僕の最低召喚魔力消費量を1000ぐらいに下げといたんだよ。だって、2億だと触れただけで人を殺しかねないからね」
龍が喋った！

「なるほどな……。だからか」
ええ！驚かないの！？

「じゃあ、始めるとしますか」

（和哉視点）

俺に勝ち目は十分ある。龍の能力はざっと、6億ぐらいか。俺のは9億だから……。この勝負いける！

「僕の相手は君だね。よろしくね」

「ドでかい龍が相手とか、この能力でもいけるんかいな……。まあ、なんだ、よろしくよ」

「じゃあ、始めます。よいい、ドン！」

―― 双脚 ―――

「うぐっ、痛いなあ……。お仕置きだよ」

やっぱり双脚じゃ、あまりダメージはないか……。硬いな

―― 雷 ―――

「遅いぜ……。うらあ！」

「ぐっ……。もう怒った」

―― 補助・魔法防御を物理防御へ変換 ――

「これで、君の攻撃は全て効かないよ」

―― 双脚 ――

「効かないって言ってるでしょっ」

「がっ」

|| ドガアアアン ||

「クッククク・・・楽しくなってきた！」

―― 人間化 ――

「この体ならスピードでも君には負けないよ」

「おっと、それで強くなったつもりか？」

―― 双脚 ――

|| ズガガガガガガ ||

「ははは、もう痛いなあ。もうその技は見切ったよ。片手で体重を支えて両足でキックを続けてるだけでしょ。それくらいなら僕もできるよ」

ん？ 少しでもフェルトスの動きが鈍くなってるような・・・

―― 双脚 ――

―― 双脚 ――

|| ズガガガガガガガガガガガガガガ ||

「さすが、龍だな。本気にならねえとヤバイな・・・」

―― 召喚・双刀『蒼氷・紅炎』 ――

「ん？ 君って、刀出せたんだ。まあ、刀で切れるくらい僕の皮膚は柔くないよ」

「そうかな・・・」

―― 双刀・連 ――

|| キンツキキキキキンツ ||

「切れないって言ってるでしょ」

―― 水・土 ――

「君の能力は9億ぐらいでしょ？ 僕の能力は6億ぐらいだけど龍と神のみ潜在能力が付くって知ってた？ そして、僕の潜在能力の効果

は相手にダメージを与えると相手から能力を吸収することができる」
なるほどね。だから、若干フェルトスの動きが鈍くなってるんだ・

「僕の能力は前の双脚からの反撃で、5千ぐらいもらった。そして、
今僕の横にある水と土の槍が君からもらった5千の魔力だよ！」

「おっと、それだけか？その程度の攻撃がどうした……。遅いんだよ！」

「フフフツ、その刀で斬ったら炎の刀って水で消えるんじゃない？」

「バーカ。誰が炎は水で消えるつつたんだ？炎は水を蒸発させるんだぜ？お前の能力は所詮6億だろ？俺は約9億だぜ？お前の方が基本的能力は弱いに決まってるんだろ！だから、俺の紅炎は消えねえ！」

―― 双刀・十字斬 ――

「ん、速いけど避けられないわけじゃない」

―― 双刀・痺峰 ――

「うぐっ……。体が……。動か……」

―― 双刀・十六夜蓮獄 ――

「まだまだ！」

―― 双刀・螺旋薇 ――

「まだ終わってないぜ！」

―― 双刀・十六方位突 ――

「がっ」

「これで最後！」

―― 双刀・旋竜天空斬 ――

「がああああ……。がはっ……。い……。痛ってえ……」

龍って弱っ。あれくらい全部避けろよ。まあ、痺峰当たったからな。当たり前って言えば当たり前だな

「あ、鱗に傷が……。龍二さん、力を解放してもいいですか？」

「いいんじゃない？ギルド壊すなよ？」

「はい。では、やらせていただきます……。！！！！」

―― 補助・全身体能力上昇・オート魔力、体力回復・全魔力開放――

さて、どうしたことか……。龍は本気ではなかったと……。フェルトスの残りは魔法しかないか……。！　そういやあの龍魔法防御を物理防御に変換してたな……。なら、魔法でいけば大ダメージいけるかもな……。後は、それにフェルトスが気づくかだ……。

「やはり、こちらの方がやりやすい……。さて、やるか……」

「これで終わりだ！」

「黙ってろ」

　ドガァン　

「はぁっ」

「うざい」

　ドゴォン　

「んぐっ」

「今までの連続技、痛かったんだから」

　スツ……ドガツ……ズガツ　

「あ……」

「君も僕が食らった分殴ってやるよ。6発だったね。正確には150ぐらい斬ってるよね。5発目いきます」

　ド……　

「最後で145発一気にいってあげる」

　ス……ズドドドドドドドドドドドドドド……ドカツ……

ズガン　

ありやりや、痛いなあれは……。もう意識やばいんじゃないか……

「今ので一億ぐらい貰ったかな？」

「はぁ……はぁ……はぁ……ぐっ、この一撃に俺の残る力の

全てを賭ける！！」

「いいだろう……。俺も貴様にやられた分と使用した魔力で能力が底に近い……。これで決着をつけてやろう」

―― 双刀分解付加・最終奥義・蒼紅参の型・神斬双蒼紅龍 ―

「!?!?・・・獣人が魔法を使うだと・・・。ならばこちらも!」

―― 分解付加・創造・全属性・虹の龍 ―――

「はああああああああ!」

「うおおおおおおお!」

フェルトスのこの技って危なかったから闇で吸い取ったんよ。だって刀が龍になるんよ?誰でもビックリするやろ。ていうか、魔法使い出したらフェルトスの体の色が白くなってるし・・・。ん?ああ、間違えた。白銀や!

|| スズズズズ・・・ドゴオオオオオオオ ||

「がっ・・・」

「ぐっ・・・」

「・・・ん、終わったっぽいね。両方倒れてるし・・・。お疲れ!」

「龍二、この勝負どうする?」

「引き分けじゃね?」

「ですね・・・」

「昼飯は?」

「無しにしようや」

「オーケー、てか本当に疲れた。」

「じゃあ、今日はもう解散だ。そーいや明日、俺ら4人でパーティー組まねえか?」

「いいぜ」

「あ、はい喜んで」

「ん、4人ということは俺も入っておるのだな。まあ、いいだろう。」

「じゃ、明日、集会場に昼から集合!」

「イエッサー」

「お疲れ様です」

「」「」「お疲れ」」「」

いざ、冒険へ

〽 龍二視点 〽

はあ、疲れたあ。魔力回復しないとぶっ倒れるかな・・・

「オッサン、200万ぐらい貸してくれ。回復瓶買ってくるよ」

さてと、金も借りたところだし、町にでも行くか・・・この辺わかんねえからライエルも連れていこ。

「ライエル、ちょっと付き合ってくれないか？」

「ほえっ？ ななな何ですか？ つつつつ付き合うってわわわ私とですか」

「回復瓶買いに行きてえけどこの辺の町はわからないかな。道案内頼む」

「ああ、そういうことですね。いいですよ」

ん？ ライエルが凄く残念そうだが・・・？

〽 町中にて 〽

「何を買うんですか？」

「魔力とか結構消費したし、明日に備えて回復瓶をね」

「なるほど、私も買っておきましょう」

「あ、ありましたよ。マナポーションとライフポーションを10個ずつ買おつと」

俺は魔力も生命力も他のやつより桁違いだから・・・

「おじさん、妖精の涙と太陽花の蜜って何だ？」

「んと、妖精から採れる魔力回復効果のある液体です。効果はマナ

ポーシヨンの80倍ぐらいだ。1リットルで1億ぐらい回復できるから誰もかわねえけどな。太陽花の蜜は太陽草が咲いた花からとった蜜だ。こっちの効果は体力をポーシヨンの10倍ぐらいあるぞ」
「ちよつと多いけど、妖精の涙を5リットルと太陽花の蜜を1リットルぐらい買おう」

「龍二さん、知ってました？食べ物に魔力を込めて戦闘後とかに食べると込めた魔力の分だけ回復できるんですよ」

「ほお、妖精の涙を訂正。100リットルくれ。それとガムのミント味も10粒ぐらいでいい」

「全部持っていく気か!？」

「そんなにお金持ってるんですか？」

「オッサンに貰った」

「なるほど」

「じゃあ、それ俺らの部屋に送ってくれ」

「有料だけどいいのか？」

「あ、じゃあやっぱやめとく」

―― 操作・俺の部屋へ ――

「操作使えるのかい」

「まあね。おじさんありがとよ。ライエル、帰るぞ」

「今日は本当に疲れましたあ」

「じゃあ、走っていいかうか」

「えっ、・・・ほああああ」

―― 部屋にて ――

「ゴール。さて、魔力込めるか」

「私は先に寝ますね」

「オッケー」

ガムを取り出してと・・・あ、その前に妖精の涙飲まなきゃ・・・。1リットルで魔力1億ぐらいだったから、8リットルぐらい飲めばいいか・・・。そして、ガムに魔力を1粒に5億ぐらい込めとくか・・・。

〽 作業終了 〽
あゝあ、腹が痛ーよ。飲み過ぎた。酒じゃないよ？もう無理。寝よう。もう疲れた。

〽 夢の中 〽

ん・・・ああ、またココか・・・。

「女神〽早くココから出せ。それと俺の眠りを妨げるな」

「あら、よく気がついたわね」

そりゃそうだろ・・・いつもこの場面ってアイツの登場場面じゃねえか

「あらいいじゃない。ココしか私の登場場面がないのよ？ただでも少ないんだからそれぐらいいいじゃない」

「俺の思考を読むな。そして、俺の眠りを妨げるな」

「大丈夫よ。この空間では、あなたが思っていることが自然と声になるから」

「じゃあ、喋らなくてもいいじゃねえか。あと、俺の眠りを妨げるな」

「よほど眠いのね。ココは夢の中で話しかけてるから問題ないのよ」
なんだよ・・・そういや、俺って、龍は召喚できたんだけど魔力足りないから神が召喚できないからてめえの魔力渡せや

「あら、レディに対してになってないんじゃない？」

黙れ、破壊神が！レディも糞つたれもあるか。早く渡せ

「全く・・・。ちゃんと出番増やしてよね」

知らん。そんなの作者に言え

（わかりましたよ）

いやいやいや、出てこなくていいから

（そうですか？残念ですね）

「私の出番を増やしてください」

真面目にお願いするな。所詮作者だぞ？

（てめえ、小説から消してやろうか？）

はい、ごめんなさい。僕も一応この小説のレギュラーなんだもん。
消されたくない！

「バーカ。龍二、神様にねだって魔法使ったりしてるやつらが小説
造ってる人に勝てるわけがないでしょ」

（そうだそうだ）

神ぐらいなら・・・

「あんたの力って元は私の魔力なんだから、私に勝てるわけないじ
ゃない」

どうでしょう？

「###」

—— 操作・女神ヘロックオン・全属性付加・不可能 ——
うお！不可能だど！？ごめんなさい許して下さい心の底から反省し
てます。

「バカね。###っていうのは、あなたたちの世界のどの属性にも
属さない。んでもって###には###か※※対応できない術よ
？あなたに操作できるわけないじゃない。」

む。

（バカですね。人間風情が勝てるわけがないのに）

むむ。

「（全く・・・だから神を召喚できないんだ）」

むむむ。皆ボクをいじめるなあー。うわーん

「そこ壁だよ」

|| ガッ ||

（痛っ）

魔力くれよ。

「そこで言うか」

「ん、魔力が欲しいんですか。あなたには100億前後の魔力がありますよ。これはあなたのからくりですか」

あんた誰!?

「はい。強くないと莫大な魔力は制御できないとおもいましたから」

「いい判断です。ですがここまで魔力を人間に与えてはなりませんね」

いやだからあんた誰!?

「ごめんなさい」

「いえいえ、大丈夫ですよ。龍二・・・」

(作者を除けものにするな)

地味に作者入ってきた!?

「龍二!」

(地味って言うな)

いや、あんた地味だろ

「龍二!!」

てかあんた帰れ!

(わかりましたよ)

「龍二!!!!」

なんだよ。うっせーな。

「シン。こいつ殺していい?」

「やめてください、私が処罰食らうはめになります」

「そうですね。今回はやめておきましょう。龍二、あなたの枷を外してあげます」

なんか、上から目線ウゼエな・・・てか、あいつシンって言うんだ
「最初の言葉はあえて無視しておきましょう。10億以上の魔力を使ったりある程度力を出すと姿が変わりますがいいですか?」
かっこいいならいいんじゃないかね?

「何故に疑問形!? あとシンって呼んだら殺すわよ」

「大丈夫です。3つに分けて姿を変えるようにしますね。まず10

億未満。10億以上50億未満。次に50億以上100億未満。そして100億以上。これでいいですか」

別にいいけど・・・何で姿を変えるんだ？

「そうでもない」と今の龍二の体では魔力が耐えきれません。なので10未満は今の状態。50億未満は髪や目の色が変わります。100億未満では翼とか生えるでしょう。100億以上は分かりません」

分からないって・・・

「100億を超える人間なんて造った事ありませんから」

こんな簡単に魔力を神が与えていいのか？

「いいでしょ。そんな面倒くさい事考えてるから弱いだよ」

「大丈夫です。私はそれでも神界の頂点に立つアフラ・マズダー様の部下の弟子ですよ。法律ぐらい無視してもある程度大丈夫です」
遠いな・・・

「ふふふ、殺してあげましょうか？私も一応###の基礎は使えますよ」

ごめんなさい。申し訳ありませんでした。僕が悪かったです。

「さてと、それでは始めるとしますか」

―― ## ## ・封印解除・絶対魔力 一一一

|| コオオオオオツ・スツ ||

ん・・・。そういや俺の魔力って、100億以上ないんじゃないっけ？

「はい。だから絶対魔力を付けておきました」

絶対魔力って何？

「自分の限界魔力を使い切ると人は倒れます。そして回復したら起き上がります。普通の人はそれだけです。この場合は魔力を使い切ると絶対量が5%ずつ上がっていくというものです。これは神に召喚された者なら絶対つける義務があります。ちなみに我々神にもついてますよ。まあ我々は10%ずつですが。」

ほえー。じゃあ、おっさんとか和哉にもついてんだ。てか、てめえ

俺にそんなの付けてなかっただろ！

「忘れてたのよ。あの暴走教師と和哉も付いてるわ。ていうかその和哉って男いきなり私の目の前に来て魔力を貰いに来たわよ」

ああ、やりそうだな

「90億ぐらいやって帰ってもらったわ」

あれ、じゃあ俺と魔力量あんまり変わらなくね？

「うん、まあそういうこと」

「そろそろ私は帰りますね」

「はい。ありがとうございます」

（シン！シン！）

なあ、女神・・・こいつ誰！？

「ああ。どうしたの？ジバルバー」

（あのね。僕のね。龍がね。またね。聖仁君にね。捕られたあゝ）

「ああ、あの暴走教師ね」

あのおっさんハンパネエな・・・

「なに？あんたってあの暴走教師と知り合いなわけ？」

うん、最近あのおっさんのギルドに入った

（しかもね。僕のね。魔力をね。与えないとね。僕のね。秘密をね。皆にね。バラすってね。脅してね。80億ぐらいね。盗られたあゝ）
なんかなあ。こいつがあのおっさんを召喚した奴かよ

「こら、龍二！そういうこと言わないの！」

言ってねえよ。思ってるだけだつうの

「とにかくあなたの闇の魔法で追い返しなさいよ」

（だってね。そしたらね。僕にね。説教をね。始めるんだもん）

なるほど。こいつの闇魔法がおっさんに影響してるんだ・・・

「わかったわかった。後で契約してやるから私の月の力を使いなさいよ」

契約だと・・・！？俺もやりた「あんたはダメ」・・・なんでだよケチ！！クソババア！くたばっちまえ！！

「魔力返して貰おうかなあゝ」

クソー！卑怯だぞ！

「何とでも言ってなさい」

もういいや

「いいのかよ！！」

そういやさ、女神の得意魔法って何？

「私は特殊で月の力を持つてるの。正式には月に力を封じていてそれを利用していうのが正しいわね。あつ、あなた達の世界の月じゃないわよ？神領の月よ」

ブレスレットに封印したんじゃないの？

「いや、月に力を9割程封印して、そのあとに残りの殆どの力をブレスレットに入れてるってわけ」

（そうしないかね。シンはね。アヌ様みたいにね。なってね。誰もね。敵わなくね。なるからね）

アヌって誰だよ

「天の最高神よ」

ちょっと待て、もともとは女神の力は解放状態だったんだろ？誰が封印したんだよ？

（えっとね。アムシャ・スプンタ様とかのね。7柱の善神がね。皆でね。シンをね。抑えてからね。僕達のね。闇でね。魔力をね。8割ぐらいね。吸ってね。そのね。力をね。月にね。封じたんだよ。そのあとのね。1割はね。皆でね。戦ってね。消費させてね。後はね。アフラ・マズダー様のね。###とね。※※※のね。複数融合魔法のね。奥義でね。ブレスレットにね。封じたんだよ）

僕達って誰だよ！？

（闇のね。神だよ。闇ってね。相手のね。力をね。吸い取るね。力がね。あるんだよ。）

「そして、私がココにいるわけ。そして私の得意魔法は創造・分解とかその辺。だけど補助が全く使えないのよ」

そういやそうだった。俺も補助使えねえな。じゃあ、俺は月の力を何故使えないんだ？

「あなたは月の力に答える事が出来ずにあなたの精神が壊れるわ。そしたら暴走間違いないじゃない。」

それもそうだ。月って強いのか？

「当たり前じゃない。私と対等に渡り合えるほどの力があっても、せいぜい月を相手にして3秒持たないでしょうね。」

お前弱っ

「力を全部解放したら月と対等になれるわね」

じゃあなんで月が最初から相手しなかったんだ？

（面倒だとかね。言ってるね。僕達をね。向かわせたんだよ）
月って捻くれた性格してるな

「そういうこと言わないの。あっそうだ。あなたが私からとった龍が持ってた魔力・体力オート回復あげようか」

あいつって、お前のだったんだ・・・。

「まあ、あの子があなたを認めたからいいんだけどね。」
サンキュー

「何よ。お礼なんかどうでもいいし」
お礼を言われるのに慣れてないんだな。

「知らない！」

（とかね。言ってるね。実はね。とてもね。心のね。何処かではね。喜んでんだよ）

俗に言うツンデレというやつか！！

「あなた達殺してあげましょうか？」

いえ、遠慮しておきます。ところでどれくらい回復できるんだ？

「10秒に魔力1万ぐらいかな。ついでに他のSSSの2人にも付けてあげよ。もうちょっと強くなったら1秒10万にしてあげる」
サンキュー

（もうすぐね。人間たちがね。起きるね。時間だよ）

「そう。じゃあね。ああ、そういえば最後に二つ言っておくわ」
なんだ？

「一つ目は私の得意魔法は通常の2〜3倍の威力があるからバーニ

ングできたら分解だけだと魔力20のバーニングに対して魔力10だけでいいわ。水を付加させるなら魔力5ぐらいで消すことが出来ることを覚えといてね。二つ目は、その他の魔法の威力を下げることによって一つの属性を強化できることとその他の属性を使えなくすることで他の魔法を前者のよりもとても強くすることが出来ることを覚えておきなさい。数値化すると前者のほうで平均威力は400ぐらいで3つの火・水・樹属性魔法、合計1200を使えるとするとなれば火属性を威力を200にすることで、 $(1200 - 200) \parallel 1000$ $1000 \div 2 \parallel 500$ という威力を出せるわけ。後者の方は、火属性を使えなくすることで $1200 \times 1.5 \parallel 1800$ $1800 \div 2 \parallel 900$ っていうわけ。暴走教師が全属性の力を前者のようにして、闇だけを上げているわ。1000を一つの魔法が単純に上回ったら使用最低魔法消費量が1000を上回った分だけ減るわ。ちゃんと覚えておきなさいよ。じゃあね」

ああ、いろいろありがとな。

） 目覚めて ）

うおっ、魔力の回復量ハンパねえな。今は8時か……。寝たのは11時だから、睡眠時間は約9時間で一時間は60分で、3600秒だから、3240万ぐらい回復たのか……。通常の10800倍ってすげえな。ん、もう時間か。さてと、集会場に集合だったな。

「あ、龍二さんおはようございます。」

「おはよ。おお、和哉も一緒か。和哉、お前って女神のどこに行きたろ?」

「ああ、よくわかったな。魔力貰いに行った」

「そんな簡単に魔力って貰えるんですか? 私も女神様に会いたいです」

「やめとけ、いいことないぞ。」

「そいや、マスターはどうなんだ？」

「ああ、マスターは龍と魔力80億ぐらい奪って行ったらしい」
「ぜってーアイツ元ヤンだよな」

「ああ、あのオッサンはとにかくヤバイ。アイツに喧嘩売ったら殺されるぞ」

「そうですね。エルフに魔法で対抗して戦う人初めて見ましたもん」
「ん？お前、エルフと契約したのか」

「戦いは全部聖仁さんにしてもらいましたけど」

「あのオッサンはやりかねないな。基本的に暇人だし」
「今日はパーティ組むんだろ？」

「そういや、ライエルちゃんは何属性の魔法使うん？」

「雷と水と炎です」

「魔力は？」

「60000ぐらいです」

「ふーん、ライエルちゃん強いなあ」

「いや、コイツ俺の手刀で倒れたぞ？」

「龍二さんが、桁外れなだけですよ！」

「そやで？俺達はあるまで特別なんよ？」

「そうですよ！」

夢の中だけじゃなくココでも皆がいじめたあゝ

「お、マスター。先に来てたのか」

「久しぶりの戦いじゃからのお」

「そういや、オッサンって何歳？」

「ワシは今70年ぐらいココにおるぞ」

「70年！？・・・にしては老けてませんよね」

「ココの世界では40歳から歳を取っていく度に30ぐらいずつ魔力が減っていくんじゃないよ。0になったら老衰で死亡じゃ」

「俺らは殺されない限りほぼ不死身じゃねえか」

「俺も65年ぐらいココにいるじよ？ギルド立てたのもワシと和哉じゃよ。」

「じゃあ、私が皆より先に死ぬってことですか？」

「いや、ワシらの誰かと契約すればいい」

「あの女神が言ってたな」

「そしたらどうなるんですか？」

「自分よりも強い奴と契約したら何かしら能力が上がる。ワシらだと潜在能力と魔力とかじゃろ」

「じゃあ、私は皆並みに生きれるんですね！」

「契約は後にして朝飯食ってパーティ組もうぜ」

「そうじゃの」

―― 朝食後 ――

「さてと、パーティ組もうぜ！」

「リーダーは誰にするか？」

「あえて、マスターだろ」

「そこはアミダクジだろ！」

「いいじゃろう」

「受けて立つ！」

「はい」

―― 結果 ――

ラ リ

イ カ セ ユ

エ ズ イ ウ

ル ヤ ジ ジ

―― ―――

―― ―――

×	—	—	—	—
×	—	—	1	—
×	1	1	—	1
○	—	—	—	—

理不尽があるような気がする・・・

「龍二さんですね」

嘘だー！！まあいいけど

「えっと、パーティ名は何にしますか？」

「お金大好きクラブ」

「却下！なんですか！その腹黒い集団のよう名前！」

「童貞集団」

「却下！変態の集まりですか！」

「ゴールデンボール」

「却下！ドラゴ○ボール的な感じで下ネタ言ってます！」

「ヒューン・ズガガガガ・ドカーン」

「却下！意味わかりません！」

「ウィーアー馬鹿力」

「却下！私は馬鹿力ではありません！」

「アイラブ美樹ちゃん」

「却下！誰ですか！」

「アイラブ初○ミク」

「却下！オタクですか！」

「アンパ○マン」

「却下！色々と痛いです！」

「ア○パンマン」

「却下！隠すところ変えても同じです！」

「アンパ○マンって和菓子じゃねえんだぞ集団」

「却下！一応パンです！」

「カレーパ○マンって具が入ってんじゃねえか集団」

「却下！だからなんですか！」

「カレーパ○マンって辛口？甘口？俺は辛口派だなあ集団」

「却下！知りませんよ！」

「シヨクパ○マン、一人だけ味無いじゃねえか集団」

「却下！やめて下さい！可哀想です！」

「ロールパ○ナちゃんってドSだろ集団」

「却下！チーム名にドSとか入れちゃダメです！」

「メロンパ○ナちゃんってブラコンじゃね集団」

「却下！違います！・・・多分」

「ジャムお○さんってジャムをつける要素が明らかに無い集団」

「却下！やめて下さい、ジャムを取ったらただのおじさんです！」

「ジャムお○さんって食べれるのかな集団」

「却下！食べたら色々とまずいです！」

「ジャムお○さんって絶対赤字だろ集団」

「却下！話がリアル過ぎます！」

「ジャムお○さん、何故チーズという猫ではなく犬なんだ集団」

「却下！どっちでもいいじゃないですか！」

「ジャムお○さんについてくるバ○コさんのことについて年中無休

で赤字生活ってどう思う集団」

「却下！リアルな考え方は本当にヤバイですって！」

「バイキ○マンって汚い集団」

「却下！言っちゃダメです」

「バイキ○マン、人質を取るとか殺し屋を雇うとかいろいろ作戦考
えろよ集団」

「却下！黒いです！」

「ドキ○ちゃんって何者集団」

「却下！わかりません！」

「アンパ○マンシリーズって最後は暴力で片づけるという教育を子どもに見せていいのか集団」

「却下！言ってることがアンパ○マンシリーズの全否定になってます！」

くそお、全拒否しやがって・・・

「最初の方がまともだった気がします。ていうか、最後の方はアンパ○マンの話になってるじゃないですか」

「『月星』なんてのはどうじゃ？」

「うわーキタキタキタ。今までのノリをぶっ壊す奴。」

「KYKYマジ空気読めコラ。」

「ちょづいてるとマジ踏み潰すぞ」

「ダメかの・・・」

「『紅い刀』はどうだ？」

「テメエまでマジになんのかよ！」

「いやいやいや、マジになりましたようよ」

「『紅い右眼』」

「私、青ですけど・・・」

「俺らは黒だろ・・・」

「魔法で変えればいいだろ」

「危ないです」

「トランプで出た数字にしてみたら？」

「それでいいじゃろう」

「老人は黙ってろ」

―― 闇 ――

「うおっ、ごめんごめん」

―― 分解 ――

「それでいいじゃないですか」

「わかったよ」

「3回して、一番良さそうなカードにしましょう」

「シャッフル・・・スピードのジャック。シャッフル・・・スピードの2。シャッフル・・・ジョーカー」

「大富豪だったら勝てますね」

「俺だつたらハートでロツクして勝たせないけどな」

「何にします？」

「スピードのジョーカー」

「そんなのありません」

「ここもアミダクジで！」

×	—	—	—	—	ク	ツ	ヤ	ジ
×	—	—	—	—	2			
×	—	—	—	—				
×	—	—	—	—	カ	—	ヨ	ジ
○	—	—	—	—	ド	—	ペ	ス

ん？また、なんかおかしいような・・・

「気のせいです」

「人の心を読むな」

「スピードじやな」

「確認させていただきます。チーム名『スピード』、メンバー名『山本龍二、田中和哉、成清 聖仁、ライエル・アロスター』リーダー『山本龍二』初めはDランクからです。なお、合言葉を言えばこへ瞬間移動が可能となります。合言葉は『女神の涙』です。」

「ランクアップしたいんですが・・・」

「ギルドカードを発行します。カードに魔力を注いでください。敵を倒すと倒した敵の名前と数が自動的に表示されます。表示された敵の数と名前で、ランクアップになります。なお、ランクによって受けられるクエストがそれぞれ違います。」

「オーケー。じゃあ、一番報酬金が高いヤツをくれ。」

「クエスト内容は、ウルフを25体倒すこと。場所は、ケラゼウス山。報酬金30万カイン、違約金20万カイン没収、契約金500カインとなっております。まっすぐ突き当たった扉を開き、中の魔法陣の真ん中で場所を唱えると移動できます。」

「じゃ、行ってくるか」

） ケラゼウス山にて ）

―― 全属性・構築・結界作成 ――

「とりあえず、一人ゴブリン30体とケンタウロス15体ずつ倒すこと。終わったやつからこの結果の中に入って休め」

「ドラゴンとか出たら？」

「ライエルと倒せ。コイツがメンバーの中で一番ドラゴン倒せなさそうだから」

「わかりましたよ！」

「ライエルがドラゴンを1体でも倒したら後は各自で倒して、最低Bランクまで上げるぞ」

「なんか、いきなりリーダーっぽい指示を出すようになったの・・・」

「どうせ私は弱いですよ・・・」

「つべこべ言わず・・・よいドン！」

） ライエル視点 ）

えっと、とりあえずゴブリンから行きましょう。あっ来た来た・・・5体かな？

「フレイムアロー！！」

この魔法は炎の矢を30本ぐらい出して相手にぶつけるといふ基本魔法です。一応、龍二さんたちに負けないように無詠唱魔法の練習してたんですからね！勝てないってわかってるけど・・・

|| ズドドドドド ||

「ぐああ・・・」

勝ったあ！・・・え？うわわわわあ！！後ろからゾロゾロ湧いてきましたあ！！

―― ラー、炎の逆鱗を今、ここへ ――

「バーニングショット！！」

「あがつ」

！？ちよつと待って下さい・・・。デビルとケンタウロスが10体ぐらいかな？

―― ハオカー、無限の閃光となりて・・・ ――

「雷光！」

「ブオオオオ！！」

わああ、ゴメンナサイ。そんなに怒らないでください。一人じゃ無理です。あっ一人じゃなきゃいいんだ！

「召喚！フレイ」

「こいつらに手間取ってんのかよ。大丈夫？」

「もう無理です。全部倒してください」

「魔力30000ぐらいだね。オーケー、余裕余裕。ライエルだったっけ？君結構魔力あるね」

「そうですか？龍二さん達に比べたらまだまだですよ」

「龍二って誰？」

「聖仁さんと同じような人です」

「あいつらはすでに人間やめてるだろ・・・」

「そうですか？」

―― ラー、天から降り注ぐ天の逆襲、――

「周辺1キロ以内に発動！バーニングメテオ！！」

範囲広っ！

「フレイムアロー！」

Ⅱ グサッグサグサグサッ Ⅱ

「この辺一帯はいなくなったよ。何体ぐらい倒した？」

「えっと、スライム128体、ゴブリンが62体、ケンタウロス27体、デビルが3体です」

「向こうで誰かがドラゴンとやってるよ」

「じゃあそちらへ行きましょう」

「この火は？」

あゝあつ、忘れてた……。火事だ火事だ！！

―― チャク、生命を狩る雨 ――

「豪雨！」

「うわあ、雨だ……。オイラ、雨嫌い」

消火完了♪

（ 和哉視点・約5分前 ）

ここはライエルちゃんに任せよ……

「俺は南の方に行ってくるわ」

ココまでくれば大丈夫だろ

めんどくさいな、近くのやつから潰していくか……

―― 全属性アロー・合計300本・操作・一番近い敵が倒れるまで ――

「いけっ」

……。ん？終わんねえな……。そろそろ全部、矢が無くなるぞ？
もしかして……

「ギヤアアアア！」

「ドラゴンやっちゃった感じ？」

「貴様か？俺に攻撃してきた奴は・・・」

やっちゃったよ・・・なんかめちゃくちゃ傷ついてる奴出てきたし・

「ごめんごめん。わざとじゃないから」

「ドラゴンブレス！！」

「危なっ。いきなり攻撃してくるな、デカトカゲが！」

「いきなり攻撃してきたのはお前だろ・・・」

まあ、そうだけど・・・

Ⅱ スズガガガガガガッ Ⅱ

「がはあっ」

「汚いな。血吐くなよ・・・」

「クソったれが！貴様、俺に何をした！？」

ただ殴っただけだけど・・・

「教えるかよバーカ」

あえて、ちよつと勿体ぶってみる・・・

「和哉さんですか！！？」

「お？ライエルちゃんやないか。どうしたん？」

「こちらはもう倒しました。後はドラゴン1体退治です」

「ああ、なるほどな。こいつ弱いからおもろないんねん。すぐに終わるで」

「言ってくれるじゃないか。この一撃で死ね！」

一一 炎・風 一一

一一 構築・全属性付加 一一

「ユアシールド！」

「フレイムトルネード！！」

間に合ってよかったー。このシールドは敵の周りにシールドを展開して閉じ込めることで相手が放った魔法が自分に返ってくるっていう俺のオルジナル魔法だよ♪

「ほえー。すごいです」

「どお？自分の技食らった気分は」

「クソったれが！！」

「ライエルちゃん、俺がアイツ縛っとくからアイツに魔法かましてみて」

「あっ、はい！」

―― 構築・鎖と重り ――

「くそっ体がっ」

―― ハオカー・ラー・チャク、三つの神の力を今ここに・・・

この一撃に全てを賭ける ――

「くそっ動け！動けええええ！」

「豪爆激雷炎水」

そこまでせんでええのに・・・

「があああああつ・・・」

「勝った！勝ちましたよ！」

「ライエルちゃん、別に複数融合魔法使わんでもええんよ？バーニングぐらいで倒せたし・・・」

「まあ、倒せたからいいじゃないですか♪」

はあ・・・ライエルちゃんの笑顔、心和むわあ

「オイラ何もしなかったな・・・」

「いえいえ♪範囲魔法で一気に2ランク上げれたじゃないですか！すごいですよ」

「ムウ、まあいいや・・・」

） 聖児視点 （

ふおっふおっふお・・・。若者にはまだ負けんわい。昨日ジバルバ1に魔力80億ぐらい貰っておいたから、もはやワシに敵なしじゃない・・・。うおっ何かきたの・・・敵はゴブリンが1・2・・・2

9体か……。惜しい！あと一体足りないの……。

「闇の刃」

ワシがザコ相手によく使う技じゃ。威力はエアーカッターぐらいじやろ

「闇の手」

魔力回復！もう面倒くさいし、範囲魔法で終わらせようかの……

—— ジバルバー、半径3kmに死者への誘いと魔守との干渉をやってくれんか？ ——

—— それぐらいね。自分でね。出来るでしょ。この前ね。80億ぐらいね。魔力をね。やったんだから。 ——

—— やらんかったらお前の秘密をばらす。いいな？それと、魔守には大量に魂が食えるとも言っておいてくれ ——

—— うう、わかったよ。だけどね。面倒くさいからね。詠唱ぐらいね。自分でね。してよね。 ——

「ジバルバー、開け、地獄への扉よ。我とジバルバーの魔力と魔法の融合、魔力2億。地獄の扉の魔守への干渉。魔力3億」

—— 死者への誘いと魔守 ——

「またお前か」

「いつ見てもごついのお」

「オレも暇じゃないんだ。急に雑魚どもが大量にやってくるし……。もしかして、お前らがあいつ等殺してたのか？ほどほどにしとけよ……。俺の仕事が増えるだろ……。さっさと終わらせてやる」

「半径3キロの魔族と魔人族の魂全部取ってええよ。そういやウルフも殺しておいてくれんかの」

「ほおー、そんなに魂が食えるのか。了解した」

暇じゃなー。今度新しい技でも創ろうかの……。

「ドラゴンを見つけたがどうするか？」

「何体じゃ？」

「2体だ」

「問題ない。殺ってしまえ」

「了解した」

うーむ、使い勝手が良いのお。それよりここら辺ってドラゴン、ちと多くないか？

「うがあああ」

五月蠅いの・・・。

「黙っておれ！闇の手」

「くそ、理不尽な・・・。」

「おいおい。お前俺の相手取るなよ」

「五月蠅くて敵わんわい。もうちょつと静かに終わらせんかい。死者への誘いも召喚しとろうが」

「あれはあくまで俺の出入り口だ」

「じゃあ消そうかの」

「分かった分かった。分かったよ。敵を黙らせればいいんだろ？」

「分かれば良い」

「全く・・・俺をこんなに使う人間は、そうそうおらんだろうな・・・」

「どうした！？我が同胞よ・・・死んでいるではないか」

「あと一体のドラゴンが来たか。探す手間が省けたの。ワシが静かに殺る手本を見せてやる」

「お手並み拝見と行こうか」

「闇の鎖！さてと「クソッ！何だこれは。貴様らが同胞を殺したのか？」五月蠅いの・・・。黙っておれ」

「喉を潰すか・・・。お前、人殺して快感を得ているようなアレな奴だろ・・・」

「五月蠅いから黙らせてただけじゃ」

「どうした？ご機嫌斜めか？」

「体が鈍っておっただけじゃ・・・。1キロ3秒ぐらいになっておるしの」

「人間では凄い方じゃねえのか？」

「バカ言え、昔は1キロ1秒以下で走っておったぞ」

「相変わらず面白いな。お前が死んでも俺は絶対お前を地獄に送れねえぜ」

「なーに、ただのウォーミングアップじゃ。ウォーミングアップの相手が五月蠅かったら敵わんじゃろ」

「それもそうだな。それよりもそろそろ、倒した方がいいと思うぞ？」

「そう焦るなて・・・。」

―― 補助 ――

「この程度の龍相手に補助なんか使わずとも殺れるだろ？」

「じゃから、ウォーミングアップじゃて。さて、行くかの」

「相変わらず速いこと。俺はお前が俺の目を盗んで地獄から逃げられる自信があるな」

「出来るかも知れんのお。いや、まずワシは地獄に行く前にお主を倒して逃げるぞ」

「その時は、お手柔らかにな。それにしてもよくその高速移動状態で喋れるな・・・」

「慣れじゃ、慣れ。ワシがこの技を何十年してきたと思っとる。2つ名を瞬足の闇と呼ばれたワシをナメるな」

「知らねえよ。俺に自慢するな。ていうか、もうそいつ死んでるぞ？いつまで蹴ってるつもりだ・・・」

「ああ、死んでおったのか。話に夢中になっとたわい」

「可哀想だな。冥土のお土産に一発ぐらい殴らせてやれば良かったものの」

「アホか。いくらワシでも龍の攻撃は痛いわ」

「1分もしないうちに龍を倒すお前が言っても説得力無いわ」

「ま、確かにそうじゃの・・・。そーいやどれくらいの敵を殺ってきた？」

「全部この辺一帯60ほどずつ」

「全部殺せと言ったろうが」

「ランクアップ条件はクリアしたからいいだろ？」

「まあよい。もう消えていいぞ」

「つくづく人使いが荒いことだ」

「どうだ？ワシの召喚獣にならんか？」

「ああ、ダメだ。俺は地獄の番人だからな」

「残念じゃのお・・・」

「さて、地獄に戻るわ。お前が地獄に来る事を待ってるぞ」

「黙っておれ・・・。さて、戻るとするか」

） ライエル視点 （

ドラゴンを倒しましたよ！でも、龍二さん達は一人で倒してるんですよね・・・。私も一人で頑張ろう！

「和哉さん！ちよっとお願ひがあるんですが・・・。魔力を4万ぐらい分けてくれませんか？」

「ん？別にいいよ？」

「ありがとうございます。突然で悪いんですが一人でドラゴンを倒してみたいのでちよっとなかなかたら、助けてくれませんか？」

「お安い御用」

「ここから南に500メートルぐらい行ったとこにかなり弱いドラゴンがいるよ。まあ、ドラゴンの最弱の部類に入る、リクルドラゴンだけだね」

「ああ、わかりました。フレイもちゃんと一緒に戦って下さいよね」

「わかったよ。ライエルを見ると危なっかしいしね」

「背負って行くよ。そっちの方が速いでしょ」

・・・この人たちは・・・恥ずかしさというものを知らないのかな・・・。

「気付かれていないみたいですし・・・」

「オイラとライエルでデカイのかましてみよ？」

「そうですね・・・。」

―― ハオカー・ラー・チャク、三つの神の力を今ここに・・・
この一撃に全てを賭ける ー

―― ラー、太陽の怒り、悲しみ、喜び、楽しみ、全てを今ここに・・・ ー

「・・・ん？何か人間とエルフの声がしたような・・・それに、匂いもする・・・。」

「豪爆激雷炎水！！！」

「炎業火爆撃砲！！！」

「！！！」

「やったー！当たりましたよ！」

「でもまだ息があるみたい・・・」

「しぶといですね」

「じゃあもう1発かます？」

「大きいのじゃなくていいですからね」

「わかつくぞ！貴様ら・・・。ドラゴン族に手を出すとはいいい度胸じゃねえか・・・。安心しろ。ゆっくりイタぶって殺してやる」
・・・」

「よく生きてましたね。凄いです」

「オイラのセリフを遮りやがったな・・・。話の途中で殺すとか言ってるやつ見ると・・・。本当に殺したくなってくる・・・。」

恐いです・・・。フレイ君じゃないみたいです・・・。だってエルフがドラゴンの目玉蹴つてるとこ初めて見ましたよ

「あがつ！ぐああああ！！！クソツクソー！」

「どうした？オイラを殺すんじゃないのか？ホラホラホラ！」
わー。素晴らしいですね。魔法を使わずに目玉蹴りドラゴンを止めを刺すエルフ・・・。絵になりませんねえ。ていうかドラゴンって基本的に誇り高いんですね

「バーニングメテオ！！！！目の前に存在するドラゴン一体に攻撃！」
「」

うわー隕石全部ドラゴンに当たってますよ・・・。

「死んだ・・・？」

「死んだ。勝ったよ」

「勝った！」

やったやったやった！ドラゴン倒しちゃった！

「ありがとう。フレイ！」

「ドラゴンって弱いんだな・・・。次呼ぶときはドラゴン一撃で倒せるぐらいになっとくね」

「ハイ！期待してますよ」

「じゃあ、オイラはもう帰るね」

「お疲れさまでした」

「ライエルちゃん強いな。ドラゴン倒したからこれでAランクやね」

「モンスター倒した分のお金拾いましょうよ」

「いちいち探すのメンドクサイ」

「でも、勿体ないですよ・・・。」

「わかったわかった。泣きそうな顔するな・・・」

―― 創造・異空間・操作・モンスターから落ちたアイテムのみ
収集・半径30km ―――

「これでええやろ」

「30km！？一体、どれくらいの魔力を消費したんですか？」

「8千万ぐらいかな」

「・・・お疲れ様です」

「集まったよ。120万ぐらいかな。」

「大儲けですね」

「そのあと30万貰えるからな。150万だ」

「龍二さんたち終わってますかね？」

「さあ？俺らは結界のところに戻っておこうぜ」

「そうですね」

） 龍二視点 ）

ゴブリンとかは手刀で倒せるけどドラゴンって俺が召喚獣みないなやつでしょ。勝てるかなあ。他のやつ倒すのもメンドクサイな・・・

―― 水 ―――

濁流起こして・・・

―― 雷 ―――

ビリビリビリ！どのくらい死んだかな？デビルが生き残ってるか・・・。そりゃそうだ。魔力今さっきので300ぐらいしか使ってないし・・・言い訳じゃないよ？

―― 火 ―――

電気分解したのをドッカーン。ハイ、終わり！ドラゴン発見しました！なんだ？このドラゴンえらく強そうだな。俺の1.5倍ぐらいの身長かな。

「やあ、ドラゴン君！君の名は？」

「ソラ」

「一体こんなところでどうしたんだい？」

「お前を殺しに来た」

「ナイスジョーク！」

「死に去らせ・・・炎の牙」

うーむ、強いな。炎の牙ってドラゴン族の下級は使えないんじゃないかな？

「すごい・・・。避けた」

「君ってドラゴン族でどれくらいの身分？」

「Dクラス」

Dであれかよ・・・。

「話す暇が勿体ない・・・。粘着炎」

「うおっと！」

「む・・・。また避けられた」

うわー。粘着炎ってゴツイな・・・。木にひっついて取れないまま燃えていく。

「ドラゴンブレス」

「龍二は避けた」

「？一人で何言ってるの？」

「いや、何もない。俺も攻撃しようかな」

「炎の粉・・・フウッ」

？

―― 水 ――

「消火完了！」

「強い・・・。」

ココから拳撃ってみればどうなるか・・・。

「はっ！」

「？なんか当たった・・・」

ゴブリンあれで一撃だったのに・・・。武器使お・・・パンパンパカパーン！イヴオンセイト！久し振り見たあ！

「炎の牙」

こいつの技ってそんな速くないな・・・。毎晩考えてた技、使えるかコイツで試してみようか。まずは魔力そのものを剣に縫って・・・

「斬飛」

ただ飛ばしてみるだけ。次は・・・

「突飛」

ただ突きをとばしてるだけ。・・・んゝ最初の拳投げるやつよりマシかな。けど・・・

「痛い・・・」

効いてない・・・。負けないぞ！えっと、次は創造でもう一個剣を作る

―― 創造 ――

「！！・・・ドラゴンブレス」

あ、さすがに危機感を感じたか・・・。まあいいや。これで今度は和哉の召喚獣が使ってた連発のアレいってみよ！

「双刀・十字斬・・・」

「んぐっ・・・」

あ、さすがに効いたか……。ユウでも効いたからな……

「双刀・痺峰……」

「ッ……！」

あの猿が使った技、よく効くなあ。

「双刀・十六夜蓮獄・・螺旋薇・・十六方位突・・旋竜天空
斬」

俺もただボーっとしてたわけじゃないんだぞ？一応使えるし……。

「ック……はああああっ！！！」

おお、回復しよった。やるなアイツ。しかし、なんでかな？

「おい、なんで俺を攻撃してきたんだ？」

「同胞が皆このへんで殺されている……かたき討ち
オッサン達か……。」

「よし、全回復……もう負けない。技はちゃんと見切った」
えらく速いことで……

「……ッ！んぐぐぐぐぐぐ……んがあっ！！！」

んがあ？くくくくく。おもしれえ！しかし、コイツの形が変わっ
てきたぞ魔力量も上がってきてるし！？

「さて、これで君に勝ち目は無くなったよ……。これが僕的能力。
心身強化。人間に全力で行くのもなんだけどね。」

「よく喋るやつになったな。無口っぽいキャラ崩壊か？」

「黙ってる……。太陽の息吹」

一一一 水・分解 一一一

「分解使えたんだ！でも君に勝ち目はないよ。」

さて、俺ももう少しだけ技試してみるか……。

） 聖仁視点 ）

ん？濁流？魔力はライエルと和哉のじゃないの……。となると、

龍二か・・・あの阿呆め

――操作・結界の中へ――

） 和哉視点 ）

ん？後ろからなんか音が・・・濁流！？

「ライエルちゃん！移動するで！」

「ふえ？ななななんですか？」

「後ろに濁流がきてる！」

「え！なんで！？」

「まあええわ。とりあえず動くで」

――操作・俺とライエルを結界の中へ――

「うおっ！ビックリした。マスターかよ。」

「マスター言うの止めんかい。ワシはマスターやめたぞ」

「それより聖仁さん、濁流来ませんでしたか？」

「ああ、きたきた。アレは龍二のじゃ」

「今、濁流はどこら辺かな？」

――風――

「大木斬ってまで見なくても・・・」

「ああ、あそこじゃ・・・」

「「！！！！」」「」」「」」

「消えましたね・・・」

「電気分解だろ」

「成るほど」

「「！！！！」」「」」「」」

「爆発起きましたね・・・」

「水素と酸素に着火したんだろ」

「成るほど」

「アヤツは環境破壊とか考えたことないじゃろうな」

「・・・」

） 龍二視点 ）

この剣はもういらね

―― 分解 ――

イヴォンセイトも閉まって・・・。

「死ね！」

「!!!!」

速くなってるな・・・。さて、実験の続き。手に雷の魔力を縫って・

・

「痺手刀」

「うぐっ、動かない・・・」

スタンガン成功！さて、次はポケットからコインを取り出して雷の魔力を縫って

「超○磁砲」

おお！出来る出来る！とある科学の超○磁砲のパクリだけど・・・。
次は両手に光を集めて・・・

「かゝめゝはゝめっ」

流石にこれはパクっちゃダメだろ。次は

「これで終わりだ！俺は手札よりマジックカード落とし穴を発動」

―― 創造 ――

「あああああああ！」

「これでターンエンドだ」

遊○王のパクリです。すみません。やってみたかったです。

「終わったか。全部使えるけどかめはめはやめとこ。さて、帰るか」

―― 操作・結界の中へ ――

「おお！皆早かったなあ」

「龍二さん、私一人でドラゴン倒せましたよ！」

「おつかれ！」

「なんですかその適当な返事は」

「俺は疲れた。もう帰って寝たい！」

「ワシもちよっと疲れたの・・・」

「じゃあ、帰るか・・・」

「」「女神の涙」「」

借金と特訓（前書き）

今日は報告があります。PVアクセス数10万突破しました！読んでくれる方々、本ッ当にありがとうございます。これからこの小説を読んでくれたらとてもありがたいです。それと、もう一つ言っておきたいことがあります。この小説、いつか作者もなんとなく登場してみようと思います。作者は気まぐれなのでキャラ設定的にもキャラは気まぐれにしようかと思っています。それでは、これからも宜しくお願いします。ココから始まる12話スタートです

借金と特訓

＼龍二視点＼

クエスト達成したからお金は手に入るし、ランクは上がるし、なんとかなるもんだな。ライエルもドラゴン倒したって言ってたし・・・。お金って全員同じ報酬金らしいから案外お金貯めやすいかもな。そういやイヴオンセイトって高い割には普通の剣とあんまり変わらないんだよな・・・。何か特殊な事でも出来んのか？あとで調べてみよ・・・。

「お前らはワシに借金してたから、報酬金はお前らの分全部貰うぞ」「マジかよ！回復薬買いに行こうと思ってたのに・・・」

「お前は勝手に回復するじゃろ」

「返せる言葉が無い・・・」

「ま、貧乏同士、がんばろうじゃないか」

「クッソー！借金なんかすぐに返してやる！」

「借金はあといくらだ！？」

「和哉があと40万で龍二が120万じゃ」「ブッ！120万！？和哉の3倍かよ！」

「適当にクエスト受けてすぐに返してやるよ！」

「ふおっふおっふお、がんばるのじゃ」

「和哉！片っ端からクエスト受けるぞ！」

「OK！龍二、まずはドラゴン1体報酬金100万。これ受けるぞ」

「私は何をしようかな・・・」

「新しい技でも教えてやろうか」

「いいんですか！？ありがとうございますっ」

「「ゼウサアス島」」

＼ゼウサアス島にて＼

「あのドラゴンは、えっと・・・ザヴァムだったっけ？」

「すぐに稼ぐ（ころす）ぞ！まずは奇襲だ」

―― 全属性 ―――

||ズドオオオオオ||

「んぐああああ！！何だ！俺の鱗が・・・！！」

―― 闇 ―――

「チッ、避けられたか・・・」

「バーニングショット」

「ヨアシールド」

ごっつ・・・

||ドドドドドドツ||

「チェックメイトだ・・・」

―― 全属性・サムドラゴンの突撃 ―――

何だ・・・あの攻撃・・・。そういや和哉って魔道書にも載っていない魔法使うよな・・・。さっきのだって龍がいっぱい出てきてアイツに全部当てたんだぜ？見たことねえよ。あんな魔法・・・謎が多い奴・・・

「おわり！」

「金、全部貰うぞ」

―― 闇 ―――

「「女神の涙」」

） 聖仁視点 （

「まずは何がやりたい？」

「えっと、それぞれの属性の威力を上げたいです」

「じゃあ、それは瞑想するしかないの、闘技場に行こうかの」

「わかりました！」

〽 闘技場にて 〽

「ライエルちゃんは雷と水と炎が使えるんだったかの」

「はい!」

「じゃあ、まず雷からするかの。魔法は威力を高めるためには魔力を大量に賭けるのと脳内で出来るだけ強い魔法を思い描くといい。通常だったら途中で名前が浮き上がってくるのじゃが、無視して更に強い魔法を思い描くとよいじゃろ。まずは魔力を10ぐらいで瞑想のみでやってみるんじゃ」

「やってみますね」

「全属性・補助・結界・半径30メートル。うむ、これぐらいでいいじゃろ」

「詠唱はした方がいいですか?」

「実践では詠唱なぞしとる暇はないからやめておく方が良好いじゃろ。出来そうならワシに撃って良いぞ」

「わかりました……!」

「ワシは防御の結界でも作っておくかの……」

「……!雷!」

「土じゃ」

〽 ヴォンツ……〽

「まだまだじゃの……。もっと鋭く一撃で仕留めるようなイメージを浮かべるんじゃ」

「わかりました……」

「土・魔力100」

「……!雷!」

〽 ズウウウン〽

「もう少しじゃ。ワシの魔力100を超えたら次に進むかの」

「はいっ!……!雷!……!」

〽 ドオオオオオオン! バチッバチバチッ! 〽

「聞じゃ」

「スッ」

10の魔力で100のしかも弱点属性の土の盾を破りおった。この子は強くなるぞ……。凄い上達、そして何よりも凄い集中力じゃ……。

「うむ、合格じゃ」

「やった！」

「ちなみにワシはこんなことを思い浮かべているぞ」

「スッ……」

「ん？何をしたかって？魔力にワシの考えを載せてライエルちゃんに送っただけじゃ」

「……す、凄い……」

「今の感覚を常に覚えておくんじゃぞ。いざという時、瞬間的に思い込めば今さっきのがすぐに出せるからの」

「ほえ……」

「今日はおしまいじゃ。和哉達も返ってきたしの」

「あ、はい。わかりました」

・
全く……。すぐにSSSになれるかも……。たのしみじゃ……。

「和哉、40万、龍二120万返せ」

「俺の金全部消えた……」

「俺は60万余ったな……。何か買い物に行こうかな」

「うむ、確かに受け取ったぞ」

さて、ワシらはどこまで強くなれるんじやろうかの……。フツ、そんな事考えても始まらぬか……。ワシは龍二とライエルちゃんの特訓でもしてやろうかの……。

アンケートです

えっと、読者のみなさん、「ココから始まる」を読んでいただきありがとうございます。突然ですがアンケートを取りたいと思います。理由はこれからどうしようかなと考えていたら、読者の皆さんが楽しい小説を書きたいので、みなさんに決めて貰おうと思ったからです。アンケートの内容は今後の「ココから始まる」のストーリー進行方向を決めて貰いたいと思います。

1. このまま、ギルドで戦う姿を描く
2. 思いきって学園とか行っちゃう
3. 旅に出てだんだん強くなっていく仲間を描く
4. その他（ご意見や提案があればお書き下さい）

皆さんの投票次第で物語を進めていこうと思います。期限は10月10日にしたいと思います。文章とかダメダメなこんな作者ですが、これからもよろしく願います。

一人でクエスト！（前書き）

さてさて、久しぶりです。テストとか重なって更新できませんでした。

すみません。本当はネタが思いつきませんでした。

そういえば、アンケート結果、実はですね。学園に行くことになりました。

というより、アンケートに答えてくれたのが一人だけって悲しくないですか！

ホント、感想くれた方、ありがとうございます。感動でボク、泣けそうです。

というか、泣いちゃいますよ。皆感想くれないから……。ガマンするけど……。まあ、とりあえず今回もがんばったので、楽しんでいただけたらと思います。では、14話目スタートです。

一人でクエスト!

〽 龍二視点 〽

「そういや、ライエル、今さっき何してたんだ？」

「えっと、特訓です。」

「ワシが特別強化特訓をしてやっとなんたんじゃ」

「なるほど、どんなことを？」

「主に魔法の威力を上げるためのイメージトレーニングじゃ」

「どうしたんですか？ 龍二さん、なんかあったんですか」

特に理由はないけど・・・

「・・・えっと・・・んと・・・魔力の質が高くなったように感じたからだ」

あえて、適当なことを言っておく

「本当ですか！？ ヤッター！ ちなみに何属性の質が高まりましたか？」

まずいっ！ 実にまずいっ！

「・・・その・・・アレだアレ！」

わかんねえっ！

「龍二・・・」

！？ 小声で俺を呼んでオッサンが炎を手の上にライエルの後ろから浮かべてる……。オッサンナイス！！

「炎かな。」

「違いますね。雷です」

「オッサン騙したなあ！！」

「ライエル、さすがに格が上がったかどうかはわかってても属性まで

「はこいつらにはわからんじやろ」

「そうですよね」

「俺をスルーするな！」

あれ？俺ってもしかしてイジられ役？？

「龍二」。買い物ついて来ねえか？」

和哉が俺にやっと話しかけてくれた・・・って

「俺金持ってねえよ！！嫌がらせか、チクショウ！！」

「稼いで来いよ。明日、六時ぐらいにココ集合な」

「あゝ、わかったよ」

「マスター、ライエル、明日は適当に別行動な」

「わかったわかった」

「ライエルちゃんは明日闘技場に集合じゃ」

「わかりました」

「皆いいな。お金持ってて」

「貸してあげようか」

「借金はもうまっぴら御免だ。クエスト受けてくる。」

「がんばるのじゃぞ」

みんなして何だよ！

「ドラゴン6体の報酬金600万のやつで」

「了解しました。契約金として30万カインです」

「持ってないっ！」

「フフフッ、ではこれはどうですか？」

受付嬢に笑われたっ！

Sランク ゲヴァルク500体 場所…ギャクエム城周辺 契約金…

0 報酬金…1100万

「なんで契約金がいらねえんだ？」

「このクエストを受けた人が8割の確率で死んでいるからです」

「恐いこと。まあいいや、これ受けるわ」

「わかりました。」

「そういや、どうやってクエスト完了とかってわかるんだ？」

・」

「魔法使えるのか……。強いな……」

さて、やっとこいつ等の容姿について話せるな……。読者のみなさん、緑色のゴブリンを頭に思い浮かべて下さい。その後、そのゴブリンが涙と鼻水でグチャグチャになった顔を思い浮かべます。そして、腕を横腹から6本くっつけてます。そして最後にゴブリンの額に目をくっつけたら完成です。とっても簡単よ♪どうですか？キモイでしょ？

「お前なあ、俺の部下をこんなに殺しちゃって……。どうしてくれんだよ？まあいいや。そんなことよりも俺と一対一で戦わ」嫌だね。ウインドカッター」

Ⅱ ズシャズシャズシャア……。Ⅱ

「……。まあ別にいいけど、これ以上その攻撃で死ぬような低レベルな奴らはいねえぞ？」

もしかして、俺が弱い奴ら全員倒しちゃった感じ？

「じゃあ、一番弱いやつから、一対一で戦おうか」

「じゃあ、お前が行け。ガヴァ」

「ヴル？」

なんて言ってるんだ？

「そうだ。お前が一番弱いからな」

あ、やっぱり仲間の言葉はわかるんだ・

「ヴァア」

「結界を張るから待ってる誰も入らせねえからな。一人ずつ入ってこいよ」

―― 全属性・操作・結界半径50m ――

「了解した。行って来い」

「ヴ」

Ⅱ スッ Ⅱ

「……」

何体かこっちを凝視してんな……。誰か途中から入るつもりだな

？こつそりとコーティングしておこう・・・

―― 雷・炎・風 ――

「さて、始めるか」

「ヴ」

「3、2、1でスタートだ。始めるぞ・・・」

コイツぐらいはイヴオンセイトだけでいけるかな・・・

「3・2・1・・・スタート！」

「ヴァッ！」

「ウィンドカッター」

前方向に何万個か作っておいて、壁みたいな感じで飛ばすんだけど。範囲が広いから絶対当たるんだよね。想像して下さい。刀の刃が何万本も飛んでくるんです。ひじょーに危ないのです。だから当然・・・。

Ⅱ ザクザクザクつ Ⅱ

バラバラ。これは相手がバラバラの实の能力者、道化のバ〇ーじやないと生きているのは無理だな。あ、別に自然系でも、大丈夫か・・・。

「「「・・・」」」

「ハイ、次の人どうぞおー」

「ヴァルク、行け」

「3・2・「カカカカカ」・・・」

鳴き声キモイ・・・

「約束違反だ。ウィンドバースト」

風の塊をぶつけるというだけ初級魔法。魔力を大量に込めると・・・

「コナゴナだな」

「「「・・・」」」

「次のやつ、ちょっと待て」

今まで倒してきた奴482体・・・。なんとも微妙な・・・。

「次から3体ずつ入ってこい」

「ツツル、ヨヨゴ、ソソボ」

「なあ、こんなにやられるのって、王が来た時以来じゃないか？」

「そうかもしれん・・・」

「・・・次はズヴァ、ニルク、ミナ・・・やっぱり9体ずつにしてくれないか？さっき6体でも死んだんだし・・・。」

「いいけど、だったら次で帰るぞ」

「じゃあ、強い奴から選んじゃいけないか？」

「OK」

「ズヴァ、ニルク、ミナは戻れ。バダ、ギャイ、テンリ、マツド、カエジ、ウアリ、ブジェ、シクと俺が行こう」

「じゃあ、結界は無しにしようか。広い方がいいし」

「いいだろう」

「3・2・1・・・スタート！」

「じゃまず、テンリが先制攻撃をして同時にギャイも攻めろ。ウアリは隙があれば紅蒼炎が打てるように準備し、ブジェが封禁魔をして、魔力を一時封印する。その後、全員でアレをするぞ！」

「了解。ビーム・・・」

作戦聞こえてんだよね・・・。

「んじゃ、こっちもビーム！」

いや、ただ雷属性の砲撃を指から出してるだけなんだけどね。なんか、アレっぽい。超電○砲・・・。

「避ける・・・」

なんかなあ。さっきの奴みたいだな・・・。

「お前、さっきの奴の親戚かなんかか？」

「目からビーム・・・」

「話す時間なんてねえよ！砲拳・振球丸」

—— 水 ——

「兄・・・」

「そうだったのか！道理で無口なところが似ていると思った」

「話してんじゃねえよ！それにしてもあの技を見切ったか。素晴らしいセンスだな」

「そりゃどうも」

「風で作った振動を水の盾で分散させたか。」

「振動を球状にまとめて相手に当てる技だな。俺もやってみよう。」

「砲拳・振球弾」

「飛ばせるのかよ！ていうかあの技って螺○丸のパクリじゃないか？」

「作者が思いついたのが後で考えれば螺○丸と同じだったただけだ。」

大丈夫、著作権には引っかけってない」

「やっぱり作者はダメだな。しかもただの言い訳にすぎないし・・・」

」

「ボクを忘れるな・・・目からビーム・・・。」

「さっきから気になってたけど、何で目からなの？」

「気分・・・。」

「だから、話す時間なんてやらねえよ！！」

「うおっ、いいじゃないか。所詮ナ○トのパクリをしているキャラクターのくせに」

「だまれ、そして、死ね。」

―― 水・雷 ――

手の平に球状の水を造って、波の振動を貯め込み、少しだけ雷を乗せるといふオルジナルだ。衝撃を食らって、電撃を食らうという二段階攻撃なのだ！

「なかなかできないな・・・。」

「かめはめ・・・。」

「ドラゴ○ボ○ルの奴だな！俺も使えるぞ！かめはめ！」

「うぁ・・・。」

一体消滅っ！

「今だ！ウラリッ！」

「OK。まかせときな。準備はとっくに出来てるぜ！紅蒼炎！」

「ん？次は向こうか」

―― 分解・水 ――

Ⅱ ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ Ⅱ

「魔力高いな・・・。」

「ブジェ、封禁魔だ！」

「はい、封禁魔させていただきます。えい」
封禁魔って、何？

―― 魔力封印・分解・水解除 ――

「うおっ！なんだ！？魔力が出せねえ！」

「皆行くぞ！闇の冥王だ！」

いや、今まであえてツツコミ入れなかったけど、作戦全部聞こえてんだよね・・・。あと、冥王さん誰！？

「闇を統べる者・・・」

「闇に生き・・・」

「闇に死す・・・」

「生物に生があるのと同じように・・・」

「闇を常に傍らに持ち・・・」

「時には闇で無へ返し・・・」

「時には闇で生を造る・・・」

「闇の冥王・・・」

『ヴェオゴルク』

でっけえー！何か、ゴツイ・・・。

「何故、我を呼んだ・・・」

魔物の上級って基本的に静かだよな・・・。なんていうか・・・クルルってやつ？

「はっ、あの人間を倒すために力をお借り頂けたらと思ひまして・・・。」

「そんなことか・・・。たかが、人間を倒すだけの為に・・・。我を侮辱しているのか？」

「いえっ、しかし冥王様、あの人間一人に我らの仲間およそ500体程やられております故、」

「御託はいい、黙ってる・・・。人間、お前は我には勝てないだろ

う。可能性はゼロに限りなく近い。諦めるなら、楽に殺してやるが・
・・」

「黙れよ。可能性なんて知ったこっちゃねえんだ。俺には・・・」
そう・・・。俺には足りないものがある。それは、

「俺には、金がねえンだよー!!」

「我と報酬金でも狙って戦うか・・・。ククッ、ククッ、クハハ
ハハハッ!! 面白い、面白いぞ!! 人間! いいだろう。こんなに
笑ったのは久しぶりだ。さて、では本気で手合わせ願おうか!!」

一人でクエスト！
(後書き)

次も、頑張りますw

あ、感想ください★

召喚 ユウ！（前書き）

手が・・・手が・・・手がああああ！！
悴んで文字ミスばかりして
しまう・・・

召喚 ユウ!

龍二視点

「しかし、人間。お前は魔力が無いじゃないか。どうやってコイツらの仲間を倒した?」

「いや、さっきまで魔法使えただけだな。なんか、フーキンマ? みたいなのをされて使えないんだわ」

「その状態で我に勝とうというのか?」

「いんや。だから、困ってんだよ」

「クククッ……。なのに、我に戦いを挑むとはただの無知な人間なのか、それとも自分の力に自信があつてのことか……」

「後者だな」

「そのことを願っているぞ……。お前ら封禁魔を解いてやれ」

「この人間の魔力は明らかにただの人間の魔力ではありません。封禁魔を解いて、もし冥王様が負けたら……」

「我が人間に負けるとでも……?」

「いえ、そういう訳では……。しかし、我らの仲間が倒されるまで1時間かかっておりませ……」

「二度は言わぬぞ」

「嫌だっつてんだろ……。」

「やめておけ。殺されるぞ。ギャイ……!」

「召喚されている分際の奴の言うことを誰が何かきくかよ!! お前は黙って主人の言うことを聞いてればいいだよ!!」

「……」

|| ズシャアア ||

「二度は言わんと言ったはずだ……。封魔禁と解け。」

「全員倒されたら、結界は無くなるからお前は俺らを殺すこととはでき……」

Ⅱ ス．．． Ⅱ

皆のキャラがクールから興奮状態のように変わっていく

「．．．」

「しかし冥王様、1対1でも、ほぼ全て1撃でやられ．．．」

Ⅱ ズン．．． Ⅱ

「あ．．．」

「．．．」

「わかりました．．．」

「馬鹿どもが．．．最初からそうしていればいいものを。お前は利口だったなブジェ．．．」

「．．．解けました。我には勿体ないお言葉、ありがとうございます。」

「さて、人間よ、待たせてすまなかったな。それでは、始めるとするか．．．」

魔力使えるようになったっぽいな．．．。相手の力をまずは確認するか．．．。

「水」

「？」

Ⅱ ガツ Ⅱ

おいおい、マジかよ．．．。手で払いのけるとはこういうことだよ？

「風」

「．．．」

Ⅱ ガンッ Ⅱ

「なんだ？ふざけているのか？」

「まあね．．．」

最速の風魔法を食らっても効かないか．．．。水と風を飛ばしとくか．．．。1秒10万回復だから、1秒間に魔力千レベルの矢を100本ずつ打つと魔力消費はほばないな．．．。

「奥義・風と水の矢」

まあ、別に奥義じゃないんだけどね．．．。

「ほお、千か……。お前、魔力多いな。」

「冥王様に褒められて光栄です。」

「……。限界は幾つだ？」

「限界？ 忘れたなあ……。そろそろ1万にするぞ」

「こればかりは少し痛いかな」

「なーに言っちゃんでんだか。千を幾つも食らっというて無視する奴、初めて見たよ」

「というより、限界は幾つだ？」

「だから、忘れたって」

「鬱陶しい……」

また、手で払いのけたよ……。

「10万だ……。」

このへんで、大概はドラゴンでも重症じゃ済まないけどな……。

「ん……。結界」

冥王ってまさか、本気でしないとヤバイ感じ？

「お前、やる気あるのか？」

「一応ね」

「次は我がいくぞ……。はっ」

Ⅱ ザザザザザザザ Ⅱ

「嘘だろ……。笑えてくるな。」

一撃一撃が地震が起きる力ってどんなだよ……。こりゃ、避けまくって一度魔力全回復して戦うか。

「避けたか……。闇の矢、10万だ」

10万であそこまでならねえぞ普通……。何か特別なことでもしてんのか？

「いつまで避けられるか……。次は20万だ」

「あー面倒くせえ!!」

―― 操作・狙撃変更 ――

「操作も使えるのか……」

冥王って魔族に入るのかな？ とりあえず、切り札の為に光は秘密

にしといっておこう。

「我がこのまま攻撃しても無駄みたいだな・・・。」

相手が、隙を見せた瞬間に持つてる召喚獣を召喚するか・・・。

「ダークボール」

「操作。」

「操作。」

！？俺の操作を上回る操作だと！？ヤベエッ

Ⅱ　ズズズズズズ　Ⅱ

「・・・地面が抉れてる」

「お前、そのように強大な力を持っていて知らぬのか、属性の能力」

「属性の能力？　んだそれ？」

「まあいい、暇つぶしにも教えてやろう」

「上目線がムカつく。雷」

「雷も使えるのか。どうだ雷と水と風の合成魔法でも俺に当ててみる」

「で、お前が死ななかったら俺の心は折れて俺の負けてところか？」

「察しがいいな。その通りだ。説明の後でもいいが」

「じゃあ後で」

「闇・神・光の能力はそれぞれに能力があり、それらはほぼ常識のようなものだ」

コイツ俺が常識知らずとでも言いてえのか？　聞くだけ聞いとくか。

俺、全属性が使えるからな

「闇は決る、呪いだ。光は跳ね返し、浄化。」

めんどくさいから俺がまとめるとこうなった。

神・・・癒し、再生、見切り、生命の創造、世界の法則変化、属性の威力増幅

闇・・・消失、呪い、光の破壊、

光・・・カウンター、浄化、闇の破壊

他はそのままの意味だそうだ。ちなみに言うまでもないが、神と闇と光以外は自然の法則を基に存在するらしい

「さて、お前の三属性合成魔法でもみせてもらおうか」

「死ぬんじゃないぞ？」

「ふふっ」

「召喚！ユウ！」

「？合成魔法じゃなく召喚か？自分の実力よりも召喚獣を頼るか・・・」

「いや、俺さっきから、三合成魔法使うとか言ってるし・・・。
あと、俺の召喚獣なめんなよ」

Ⅱ コオオオ Ⅱ

「龍っ！？」

「久しぶりだね、龍二くん。今回はあれ？」

「ああ、倒したら帰れるらしい」

「闇の冥王だっけ？正直勝てる自信ないよ？」

「大丈夫だ。回復次第で援助に向かう。」

「了解。さて冥王さん、ゲームをしないかい？」

「ゲーム？」

「サイコロを振って偶数が出たら僕が君を攻撃する。逆に奇数が出たら君が僕を攻撃する。それぞれ一回ずつ交代でサイコロを振りあってどんどん攻撃力を上げて攻撃をしていく」

「面白そうだ。いいだろう」

召喚 ユウ！（後書き）

指が冷たいのです

魔王召喚!?(前書き)

眠い・・・です。

魔王召喚!?

＼ 龍二視点 ｝

俺はガムでも食べてるか。殆ど魔力は召喚に使ったからな。よかった、俺の非常食・・・。

「じゃ、まず僕から・・・2」

＼ ガツ 〓

「次は俺か・・・4」

＼ ドツ 〓

「・・・4」

＼ ガン 〓

「・・・2」

＼ コオオオ 〓

「・・・6」

＼ ガアアアアン 〓

「・・・4」

「・・・2」

「・・・6」

冥王弱っ

「・・・2」

偶数しか出てねえぞ?・・・ユウのやつ、自分の魔力で作ったサイコロに偶数しか出ない作りにしてるな・・・

「・・・4」

馬鹿だ、冥王気づいてねえし・・・!!

「もうボロボロじゃないか。冥王さん」

「貴様あ・・・」

気づいたか?

「運が強いな」

気づいていらっしやらない!! もしかして、冥王って天然!?

「6・・・ガアッ」

「4・・・流光群」

「4・・・ウグッ」

「2・・・氷凍龍」

あらあら、カチンコチンになっちゃった

「6・・・ングッ」

あ、手だけは動かせるんだ・・・手まで凍った

「4・・・溶熱龍」

冥王の体が割れた

「ううううう」

闇で繋いだっ。そろそろ全回復したかな

「召喚! リアス!」

また、魔力が殆ど無くなった・・・

「ん? 友達が来たからこの子も混ぜようよ」

「お前ら何をしている・・・」

「これでも立派な戦いだよ」

「め・・・冥王・・・さ・ま?」

「ん? 誰だお前、早くこっちに来い。こいつを我は早く潰したいのだ」

「3人になったからルールを変えようか。1・2だったら冥王さん。3・4だったら僕が。5・6だったらリアスくんがそれぞれ二人からの攻撃を受ける」

「わ、わかりました」

「了解」

また、ガム食べなきゃ・・・

「サイコロも変えようか。」

あ、また冥王にのみ当たるようにしてあるし・・・。

「じゃあ、また僕からするね!」

「いや、お前にさせると俺だけがなぜか食らってるから、俺からするぞ」

「はいはい、どうぞ♪何が出るかな、何が出るかなあ・・・2」

Ⅱ ドゴォォオン・ガァアンⅡ

「大丈夫？次はリアス君ね」

「・・・2」

「ぎゃああああ」

いい加減気づけよ

「・・・1」

「・・・2」

「・・・1」

「・・・2」

「・・・2」

「・・・1」

「リアスとか言う者・・・」

そろそろかなあと思ってたんだよね

「お主も運が強いな」

やっぱり気づいてらっしゃらない!!!!

「・・・1」

もう勝手にやっててくれ・・・。召喚したやつ生き残り暇そうだなあ・・・

「なあ、お前等一緒に賭けをしないか？」

「なんだ」

「簡単なことだ俺は魔法を一切使わず素手でお前等と戦う。もちろんお前等は武器はもちろん魔法も使っている。致命傷を与えた者が勝ち。どうだ？」

「フン。我々を舐めるのも大概にしろ。いいだろう、その勝負受けてやろう」

「一人だけは生き残れよ。俺が冥王と戦えないから」

「我々を滅ぼした方がお前の寿命が延びるであろうに……。愚かなものだ……。」

「いいんだよ。好きでやってんだから。あ、それと六人とも同時に掛かってきていいからな」

「フン。まあ、良い。遠慮なく武器や魔法は使わせてもらうぞ。では、こちらから参る。お前ら、我は絶奥義を使う。あとはお前らに任せたぞ」

「絶奥義だと！？そんなことをせずとも冥王様がアイツと戦うまでの時間稼ぎをすればいいんだ。」

「その時間稼ぎが絶奥義だ。アイツの魔力をってみろ。俺らが魔法が使えるから有利に思えるが、実際では逆に俺らはアイツの魔力を使うに値しないんだ」

「……。」

「ならば我も絶奥義を使う！一人の絶奥義より二人の絶奥義がより強力だ！」

おー、あついねえー

「俺もだ」

「左に同じく」

「右に同じだ」

「俺も参加してやる」

「ダメだ。お前らの内、二人は残れ。俺らが絶奥義をした後、最大奥義を二人で全魔力を注いで出すんだ」

「じゃあ、魔力が多いカエジとウアリは残れ」

「了解した」

「詠唱を始めるか」

こいつ等学習能力ねえのかな……。全部作戦聞こえてんだって

「果てしなき深い闇に惑いし者よ」

「幾度となく同じ闇を彷徨いし者よ」

「闇を常に傍らに持つ者よ」

「ソナタ等の出口を我が与えんとす。我の命より、我が敵となる者

を死へと誘え」
『降臨、魔王アイリル！……！』

魔王召喚!?(後書き)

ふあああ...。Z
Z
Z

ウアリの暴走（前書き）

えっとお、まず・・・。

すみませんでした！！！！

受験で忙しかったとか、入学式で忙しかったとか、春休みは友達との思い出作りで泊まりに行ってたとか、言い訳はしません！！
ただ、言い訳を聞いていただけなら！！

受験で忙しかったんです！

入学式で忙しかったんです！！

春休みは友達との思い出作りで泊まりに行ってたんです！！！！
こんな作者を許して下さい。

ウアリの暴走

（ 龍二視点 ）

『降臨、魔王アイリル！！！！』

Ⅱ サラァァ Ⅱ

砂になった・・・？

「なるほどね。絶奥義つてのは魔力干涉だけでなく、魔法を使うために肉体も干涉するのか・・・」

「久しぶりの人間界・・・！！・・・？ヴェオゴルクではないか！！久しぶりだなあ」

「ん？お前何しに来た、アイリル？お前もゲームに参加するのか？」

「？ゲーム？」

「まあいい。こっちへ来い。遊び方を教えてやろう」

「面白そうだ」

そこは闘おうよ。魔王さん・・・。4人も犠牲になって召喚されたんだからさ・・・。ゲーム何かしないで

「太陽神の右腕！」
ラースライトアーム

Ⅱ スツ・・・ガンツ・・・ Ⅱ

「遅いっつの・・・。あと一人か」

（ ウアリ視点 ）

また一人仲間が消えた・・・。

「残りはお前だけだぞ」

「くっ・・・」

無念だ・・・。我は・・・無力だ・・・。

「どうする？戦うか？個人的にはお前を生き残させたいんだが・・・

「何を言っている？我が死ねば冥王も魔王も人間界からいなくなるんだぞ？」

「だから、その冥王と戦いたいんだって・・・」

馬鹿か？アイツは。それでも人間から命拾いされるなんてごめんだ・・・。そんなくらいなら・・・。いっそのこと・・・。

「我の冥土の土産に貴様の腕一本でも貰ってくぞ!!」

―― 構築・結界・全属性 ―――

「!!」

「詰みだ」

何をされたか判らなかった。ただ、一瞬のことで。我は腕に残りの魔力を振り絞って攻撃をしたはずなのに・・・。「俺はどうしてこの状況になっている？」

体を地面と結界で繋ぎ、動けない状況にしてある・・・。

「お前の攻撃をかわして、頭を持ち、そのまま地面に抑え繋げて今の状況だ」

「これ以上の屈辱は無い・・・殺せ。」

「嫌だっつってんだろ」

くそっ・・・！くそっ・・・！何故・・・！何故・・・！！我は・・・

・我は・・・こんなにも無力なのか・・・！！

「さてと・・・!!」

・・・コロシテヤル・・・

＼ 龍二視点 〵

魔力の質が変わった？

「コロシテヤル」

「とは言っても、動けないだろ」

〓 ガシャアアツ 〓

「なっ!!？結界が壊れた!!？」

アイツにはもう魔力はさっきので使い果たしたはず・・・俺の境界をどうやって・・・？

「ジャマ・・・ケス」

異様だな。この魔力の流れは・・・。

一一一 水 一一一

「脚一本貰うな」

一一一 闇 一一一

水が闇に吞まれた！？ならば魔力5倍

一一一 水 一一一

一一一 闇 一一一

またか・・・50倍

一一一 水 一一一

「ジャマ、死ネ」

一一一 闇 一一一

ダメか・・・。闇にはあえて闇で闘おうか。確か、同属性の戦いは魔力の量で勝敗が決まるってライエルが言ってたな。・・・ならば10億行くか

「ウットウシイ、シネ、ジャマ、オワリ、ケス」

怨？なんなんだ？この闇の塊は！？

「オワリ、オワリ、オワリ、オワリ、オワタ、オワリ」

オワタ！？

「オワリ、オワリ、オワタ、ワロタ、オワリ」

ワロタ！？なんかドサクサ紛れに結構なこと言ってるぞ？つと、やべえよ。あの闇の塊みたいな球体

） リアス視点 （

「4人になったから、八面サイコロを使おうよ。1. 2が魔王で3. 4が冥王5. 6が僕で7. 8がリアスちゃんね」

「了解。では、右回りで始めよう。それでは我から・・・」

2
ぐ
ふ
つ

4
が
は
つ

1
あ
ゐ
あ
つ

3
うぐつ

なんで気づかないかなあ・・・？ゲームでこのままだったら勝てる
気がする・・・。

ウアリ視点

く
つ
く
つ
く
つ
く
く
・
・
・
○

[illegible]

や ひ や つ ・ ・ ・ °

[illegible]

龍二視点

えっ
と
です
ね。

相手の魔力が異様な動きしてるし……。いや、むしろもっと異様になったな……。

皆、楽しそうだなあ……。4人はサイコロで遊んでるし、1人はなんか1人で笑ってるし？

「なんじゃ？ 魔力環境がおかしゅうないか？」

あ、気づいた！

「さんざん殴られて嫌になったからって、魔力環境を理由にゲームから抜けるってのは無しですよ。冥王さん？」

いや、実際におかしいんだって！！

「はい……。」

論破されてるし……。

「いや、本当におかしいぞ？」

あ、魔王も気づいた！

「だから、魔力環境を理由にゲームから抜k……。」

あ、皆気づいた！ 助けてくれえ！ 一人じゃ何かアレ（なんか暴走してる奴）の相手は恐いよお！

「まあ、あの小僧がなんとかしてくれるじゃろ……。」

ハイ、見捨てられたあ！

「そうですね」

ハイ、仲間にも見捨てられたあ！

「じゃが、魔力の波動がこっちに来るから、サイコロが上手く振れんぞ。」

「そうですね。じゃあ、ちゃっちゃとアレ（何か暴s以下省略）倒しましうか」

省略しちゃうダメでしょ！？ ただせさえ、アレって略してんのに……。

「えいつ」

落雷？

「……。」

なんだよ。やべえよ。あの魔王誰だよ。落雷一つで底が見えないくらい深く地面に穴あいてるぞ。

……つうか、当たってねえし（笑

「惜しいっ！」

「次はワシじゃ……。ほいつ」

よし、メンドクサイから擬音語で表現するぞ！ドガアアアンだ！！

「効かないか……。10億の瞑想付きだぞ？」

瞑想ってなんだ？

「んじゃ、もう一回、ワシが……。てりゃっ」

？雷？いや、それにしても眩しいな……。

……。エ？？光？アレ？キミ、魔王だよね？

「はづれか」

命中率低っ！

「ヴェオゴルク、久しぶりに融合魔法使わねえ？」

「アレにか？」

「10億の瞑想で死なないんじゃぞ？」

「それもそうか。」

「瞑想と詠唱は？どうする？」

「本気でやってみようか」

「こんなんだから暴走はめんどくせえんだよ……。」

「始めるか」

いや、ずっと思ってたんだけど。この間になんでアレ（何か以下省略）は攻撃しないんだ？

「「……」」

はははっ……。何あの魔力……。見えるを超えて掴めそうだよ……。あ、掴めた！

「「……」」

「我の左の者の名、ヴェオゴルク」

「我の右の者の名、アイリル」

「「それは、まるで鬼神の如き力を持ち」」

「「それは、まるで守護神の如き守を持つ」」

「「それは、まるで女神の微笑みをし」」

「「それは、まるで……」」

「お前ら、ただ殴っただけだったろ!？」

「ストレス解消っ」と

駄目だ。話聞いちゃあいねえ・・・。

「じゃあ、帰るねえ」

「お疲れ・・・。」

さて、俺も帰るか・・・。

「女神の涙」

ウアリの暴走（後書き）

龍二のイヴオンセイトについて価値が高い理由を今回で書こうと思
ってましたが、気づいたら違う事書いてました！！

自分でも超ビックリですw

では、次回も宜しくお願いします。

あと、感想ください！！！！

お願いします！！！！！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9739i/>

ココから始まる

2011年10月6日08時54分発行